第33回 2022年4月29日(金・祝)、30日(土)、5月1日(日)
東京国際コイン・コンヴェンション

33rd TOKYO INTERNATIONAL COIN CONVENTION 2022.4.29 ~ 5.1

東京・日本橋　ロイヤルパークホテル 3階　入場無料

期間中　無料鑑定・相談コーナーを設置

主催/日本貨幣商協同組合

TICC TOKYO INTERNATIONAL COIN CONVENTION

5月1日はコインの日

お問い合せ
東京都港区新橋2-16-1 ニュー新橋ビル409
TEL.03-3508-1701 FAX.03-3593-1029
■ 日本貨幣商協同組合ホームページ
www.jnda.or.jp

■ 後援／独立行政法人 造幣局・独立行政法人 国立印刷局
外務省・文化庁・日本赤十字社・中央区
駐日英国大使館 国際通商部・フランス大使館
■ 協賛／(株) ロイヤルパークホテル

第 33 回東京国際コイン・コンヴェンション開催にあたって

Welcome to the 33rd Tokyo International Coin Convention

令和 4 年 4 月
日本貨幣商協同組合
理事長 **関 口　　寧**

April, 2022
Japan Numismatic Dealers Association
Chairman **Yasushi Sekiguchi**

今年も国内外の貨幣収集家の皆様に絶大なご支援を頂いております、東京国際コイン・コンヴェンションを開催する運びとなりました。

開催にあたり、ご後援を独立行政法人造幣局・独立行政法人国立印刷局・外務省・文化庁・日本赤十字社・中央区・在日各国大使館様より賜っております。感謝申し上げます。

また、様々なご協力を頂いた貨幣研究会、収集家の皆様、そして毎回熱心にご来場頂いております皆様にも、心より感謝申し上げます。

今回の東京国際コイン・コンヴェンションは、新型コロナウィルス感染防止対策を万全に整え、安心・安全を最大限に考慮しております。このような時期ですので、なおさら貨幣収集家の皆様のお手伝いや交流の場となる事が出来れば、大変喜ばしい事と思っております。

今年の 2 月には北京冬季オリンピックが開催され、日本人選手の活躍は日本国民に大きな感動を与えてくれました。11 月には FIFA カタールワールドカップが開催を予定されています。今から我が国のみならず世界中の感動を期待しております。

今年のテーマは「円誕生」です。新しい時代、貨幣単位も両から円へと変わり、加納夏雄のデザインの旭日図・龍図の貨幣が生まれました。歴史を象徴するこの貨幣の一大展示が今回、造幣局造幣博物館、更に収集家の皆様のご協力により実現しました。稀少な貨幣の数々をぜひご覧ください。
なお、特別展示としてロイヤルミント製造の「明治 3 年銘菊桐旭日龍試作貨セット」を展示致します。大変貴重なコレクションをごゆっくりご覧下さい。

日本貨幣商協同組合は健全な貨幣収集の発展を目指し、「日本貨幣カタログ」「鑑定書」の発行、展示会・即売会の主催・後援を行っております。5 月 1 日は当組合が貨幣収集の発展をめざし 2016 年に制定した「コインの日」です。ゴールデンウィークのひと時を、東京国際コイン・コンヴェンションでお楽しみ下さい。皆様のご来場をお待ち申し上げます。

The 33rd Tokyo International Coin Convention will begin soon, which has received tremendous support from domestic and foreign coin collectors.

On this occasion, we'd like to express our deep gratitude to the Japan Mint, the National Printing Bureau, the Ministry of Foreign Affairs, the Agency for Cultural Affairs, the Japanese Red Cross Society, Chuo Ward, Tokyo, and the foreign embassies in Japan for their patronage.

We are also grateful to numismatic clubs and study groups for their various assistance and coin collectors and fans who visit the Convention every year with keen interest.

You can rest assured that we are taking all possible measures to prevent COVID-19 infection, giving the utmost consideration to the visitors' safety under the circumstances. We hope that this Tokyo International Coin Convention will be a place for people who love numismatics to meet and interact with each other in this difficult time.

The athletes' excellent performance at the Beijing Winter Olympics in February greatly impressed the world, and our Japanese athletes' performance also inspired Japanese people. In addition, the FIFA World Cup Qatar 2022 is scheduled for November. The event will surely excite the world again.

The theme of this year's Convention is "The Birth of the Japanese Yen". With the new Meiji era, which began in 1868 and lasted till 1912, the monetary unit has changed from Ryo to Yen. As a result, a new coin with the rising sun and dragon designed by Natsuo Kano was born. A major exhibition, symbolizing history, has been realized with the cooperation of the Japan Mint Museum and the collectors. We urge you to visit and look at these rare coins at the exhibition.

As a special exhibit, the "Prototype Coin Set with Inscription of Meiji 3 on the Design of Chrysanthemum, Paulownia, Rising Sun, and Dragon" minted by The Royal Mint will be displayed. Please don't miss this invaluable collection.

The Japan Numismatic Dealers Association, an organizer of the Convention, promotes sound numismatic collection by publishing the "Japan Money Catalog" and "Appraisal," sponsoring and supporting exhibitions and sales.

May 1 is "Coin Day", established in 2016 by our association to develop coin collecting. So why don't you visit and have an enjoyable time at the Tokyo International Coin Convention during the Golden Week holidays? We look forward to seeing you soon.

THE ROYAL MINT®
THE ORIGINAL MAKER

英国王立造幣局から、コイン収集家の皆様へ

英国コイン鋳造の先駆者として、本年の東京国際コイン・コンヴェンションにゲスト・オブ・ホナーとして参加できることを光栄に思います。1,100年以上の歴史を持つ私達は、コインの輸出において世界をリードする造幣局であり、コインの収集を楽しむ方々のために、試行錯誤されたデザインの製品とサービスを提供することに誇りを持っています。

また、本年は泰星コイン株式会社との提携により英国王立造幣局として初のオークションを開催し、収集家の皆様に新しい貨幣や珍しい古銭を提供できることは、コンヴェンションのゲスト・オブ・オナーとして大変に意義を感じております。

コインには多くの場合、豊かで魅力的なストーリーがあり、オークションに出品される厳選された各コインは、皆様のコレクションに追加する意味が大いにあると思っています。皆様のコレクションに英国コインを追加して頂けましたら幸いです。是非、英国王立造幣局のブースへお立ち寄りください。

royalmint.com

CELEBRATE | COLLECT | INVEST | SECURE | DISCOVER

沖縄復帰50周年記念貨幣発行

沖縄復帰50周年を記念するための貨幣が発行されます

本記念貨幣は、独立行政法人造幣局から通信販売をいたします（金融機関等の窓口における引換えは行いません）。
申込方法等の詳細については、2022年5月15日（日）14時以降、造幣局のウェブサイト（https://www.mint.go.jp/）において公表予定です。

（表面）

一万円金貨幣

首里城正殿と琉球舞踊
「四つ竹（ゆちだき）」

千円銀貨幣

首里城正殿とノグチゲラ（県鳥）
とデイゴ（県花）

（裏面）

伝統工芸
「紅型（びんがた）」

伝統工芸
「紅型（びんがた）」

※画像はイメージのため、現物とは異なります。

写真：首里城公園首里城正殿

新型コロナウイルス感染予防の観点から、東京国際コイン・コンヴェンションを記念した貨幣セットをはじめ、造幣局製品の販売は行いませんので、予めご承知ください。

独立行政法人 造幣局
https://www.mint.go.jp/

第33回ＴＩＣＣ

独立行政法人 **国立印刷局** **特別展示**

「乙百円の誕生とお札の変容」

昭和5(1930)年に発行された日本銀行兌換券乙100円（以下、乙100円券）は、初めて聖徳太子の肖像が採用されたお札として知られていますが、その肖像は日本人が初めてデザインしたものです。また、聖徳太子にゆかりのある法隆寺宝物など日本古来の文様を元に図案化した図柄を多用し、従来にはなかったデザインのお札となりました。この乙100円券が発行された前後のお札を取り上げ、明治から昭和にかけて、お札がどのように変容したのかをご覧いただくとともに、海外のお札の影響についても紹介いたします。

日本銀行兌換券 乙100円　昭和5(1930)年

伝統的な重厚感のあるデザインを採用したお札
日本銀行券C10000円　昭和33（1958）年

ちょっと足を延ばして お札と切手の博物館

東京都北区王子1-6-1　TEL 03-5390-5194
開館時間　9：30～17：00
休 館 日　月曜日（祝日の場合は翌平日）
アクセス　JR京浜東北線 王子駅下車（中央口）徒歩3分
東京メトロ南北線 王子駅下車（1番出口）徒歩3分
都電荒川線（東京さくらトラム）王子駅前下車 徒歩3分
＊駐車場はありません

https://www.npb.go.jp/ja/museum/　お札と切手の博物館　検索

＊新型コロナウイルス感染拡大防止のため、ご入館時に検温、手指の消毒、マスクの着用をお願いしております。
状況によっては、臨時休館する場合もございますので、ホームページやお電話でご確認のうえご来館ください。

web展示
「印刷局の切手の技術」開催中！

当館では、ウェブを活用した分かりやすい情報提供のための取り組みを行っています。今回は、国立印刷局が独自の技術を用いて製造した切手の中から、注目すべき切手と技術についてウェブ展示の形式で紹介しています。ぜひご覧ください。

https://www.npb.go.jp/ja/museum/tenji/webtenji/top.html

第2次国宝シリーズ第8集
「東照宮陽明門」　100円
昭和53(1978)年

お札と切手の博物館　Banknote and Postage Stamp Museum

第33回東京国際コイン・コンヴェンション ご来場の皆様へ

■国立印刷局展示コーナーで例年実施しております「凹版印刷体験」につきましては、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止させていただきます。楽しみにされていた方には大変申し訳ありませんが、ご理解のほどお願い申し上げます。

■スーベニアカードおよび図書カードNEXTにつきましては、対象となる「通用停止券」が無くなったことから、昨年の第32回(開催中止)をもって製造を終了いたしました。永らくのご愛顧誠にありがとうございました。開催中止となった第31回と第32回のスーベニアカードの会場での販売につきましては、以下のとおりとさせていただきます。

第31回・第32回TICCスーベニアカードの会場販売について

・0001～0100番につきましては、**第31回・第32回／同番号セット販売**といたします。
・新型コロナの関係で整理券を配布することが禁止されているため、0001～0050番の若番につきましては、中身の見えないブラインドパッケージの形で販売させていただきます。また、ラッキーアイテムとして、シークレット（0000番）を1組設定いたします。
・0051～0100番につきましては、0051番から順に販売いたします。番号の指定はできません。
・第31回・第32回ともに会場特別価格1,300円（税込）を適用いたします。
セット販売では2,600円(税込)となります。
・当日の状況によりましては、購入枚数に制限を設けさせていただきます。また、いかなる理由があっても**返品・取替には一切応じられません**ので、あらかじめご承知おきください。

実情をご理解の上、皆様のご協力をお願い申し上げます。また、ご不明な点等ございましたら下記までお問い合わせください。

◆会場特別価格◆

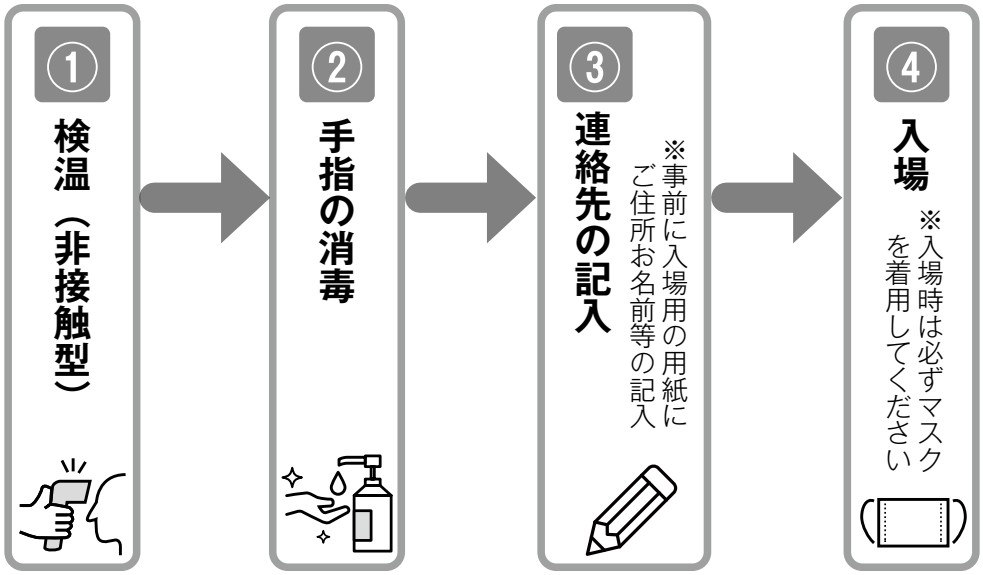
第31回・第32回TICCスーベニアカード
　セット 2,600円（税込）
　単　品 1,300円（税込）

第31回・第32回図書カードNEXT
　和文・英文　各950円

一般財団法人 印刷朝陽会
Insatsu Choyokai Foundation
〒114－0016
東京都北区上中里2－30－2
Tel　03（3927）8796
Fax　03（3927）8798
http://www.choyokai.or.jp/

ご入場までの流れ

新型コロナウイルス感染症予防のため、ご入場までの流れを大幅に見直しています。皆様にはご不便をおかけすることとは思いますが、感染リスクを最小限に抑えるための取組みとなりますので、必ずご来場前に下記の事項についてご確認いただき、東京国際コイン・コンヴェンションで楽しんでくださいますよう、ご理解、ご協力をお願いします。**ご来場時には予めご住所・お名前等をご記入済みの「会場へお持ちください」用紙、または、入場用紙（ホームページよりダウンロード）を必ずお持ちください。**



※入場用紙をお持ちでない方は日本貨幣商協同組合ホームページ（www.jnda.or.jp）よりダウンロードの上お持ちください。

※混雑時は入場及び時間制限を行う場合がございます。

新型コロナウイルス感染予防として お客様へのお願い

・入場の際は必ずマスクの着用をお願い致します。
※マスクを着用していない場合は入場できません。受付にて販売をしております。
・受付に消毒液を設置しております。入場の際は手指の消毒をお願い致します。
・受付で検温（非接触型）を行います。
※ 37.5 度以上の発熱がある方、倦怠感のある方、風邪の症状のある方につきましては入場ができません。
・受付でお名前、お電話番号の記入（入場用紙）又はDMに同封の「会場へお持ち下さい」の紙を必ずご提出下さい。
・会場内ではお客様同士の距離を十分にとって下さい。

目次

大会委員長挨拶 …… 3
スケジュール・会場案内 …… 13
ブース案内図 …… 14
参加社名 …… 15
展示品・企画品 …… 16
特別販売品 …… 17
円銀が来た道 …… 岩橋 勝 … 21
文化人の肖像採用のD券シリーズから、偽造防止対策強化のE券へ… 植村 峻 … 29

The 33rd TOKYO INTERNATIONAL COIN CONVENTION

コイン・コンヴェンションとイベントの日程

ロイヤルパークホテル３階（ロイヤルホール）

4月29日(金・祝)	10:00		開会式	Opening Ceremony	
	10:30		一般開場	Exhibit Area opens to Public	
	9:00～12:30	2F ミーティングルームA	東京コインオークション 2022　下見		2F Meeting roomA
	10:30～20:00	4F 瑠璃	東京コインオークション 2022	Taisei Auction	4F Ruri
	13:00～17:00		チャリティーくじ		
	14:00～15:30	クラウンルーム	講演（岩橋 勝先生）	Lecture(Dr.Iwahashi)	Crown room
	16:00～17:30	クラウンルーム	セミナー（日本貨幣協会）	Seminar	Crown room
	18:00		閉　場	Exhibit Area closes	
4月30日(土)	10:00		一般開場	Exhibit Area opens to Public	
	11:00～	クラウンルーム	日本赤十字社　世界のコイン配布（チャリティー）		Crown room
	12:00～17:00		チャリティーくじ		
	13:00～15:30	クラウンルーム	講演（植村 峻氏）	Lecture(Mr.Uemura)	Crown room
	16:00～17:30	クラウンルーム	セミナー（外国コイン研究会）	Seminar	Crown room
	18:00		閉　場	Exhibit Area closes	
5月1日(日)	10:00		一般開場	Exhibit Area opens to Public	
	11:00～	クラウンルーム	日本赤十字社　世界のコイン配布（チャリティー）		Crown room
	12:00～16:00		チャリティーくじ		
	14:00～15:30	クラウンルーム	セミナー（日本近代銀貨研究会）	Seminar	Crown room
	17:00		閉　場	Exhibit Area closes	

※延期の場合は、8月16日～17日開催予定

コンヴェンション会場と交通機関

TICC

会場　ロイヤルパークホテル　ROYAL PARK HOTEL

3F　ロイヤルホール　　Royal Hall 3rd Floor

〒103-8520 東京都中央区日本橋蠣殻町２－１－１　TEL 03－3667－1111

今回も、東京の中心部日本橋・蠣殻町にあるロイヤルパークホテルにて開催されます。国際ホテルとして高いグレードを誇るロイヤルパークホテルの3階「ロイヤルホール」と「ホワイエ」にて国立印刷局をはじめ、海外の造幣局の展示や、国内・海外の参加業者の展示即売会が繰りひろげられます。

歴史的にもこの蠣殻町は、徳川幕府が享和元年（1801年）銀貨鋳造所を銀座2丁目から蠣殻町に移転させ、明治2年に造幣局ができるまでの68年間、銀貨の鋳造を行ったゆかりの地でもあります。

- 東京駅より2km（車で10分）。
- 地下鉄半蔵門線、東武伊勢崎線「水天宮前駅」に直結。
- 地下鉄日比谷線、都営浅草線「人形町駅」より徒歩5分。
- 東京シティー・エアターミナルに隣接。
- 車で成田空港へ60分、羽田空港へ30分。

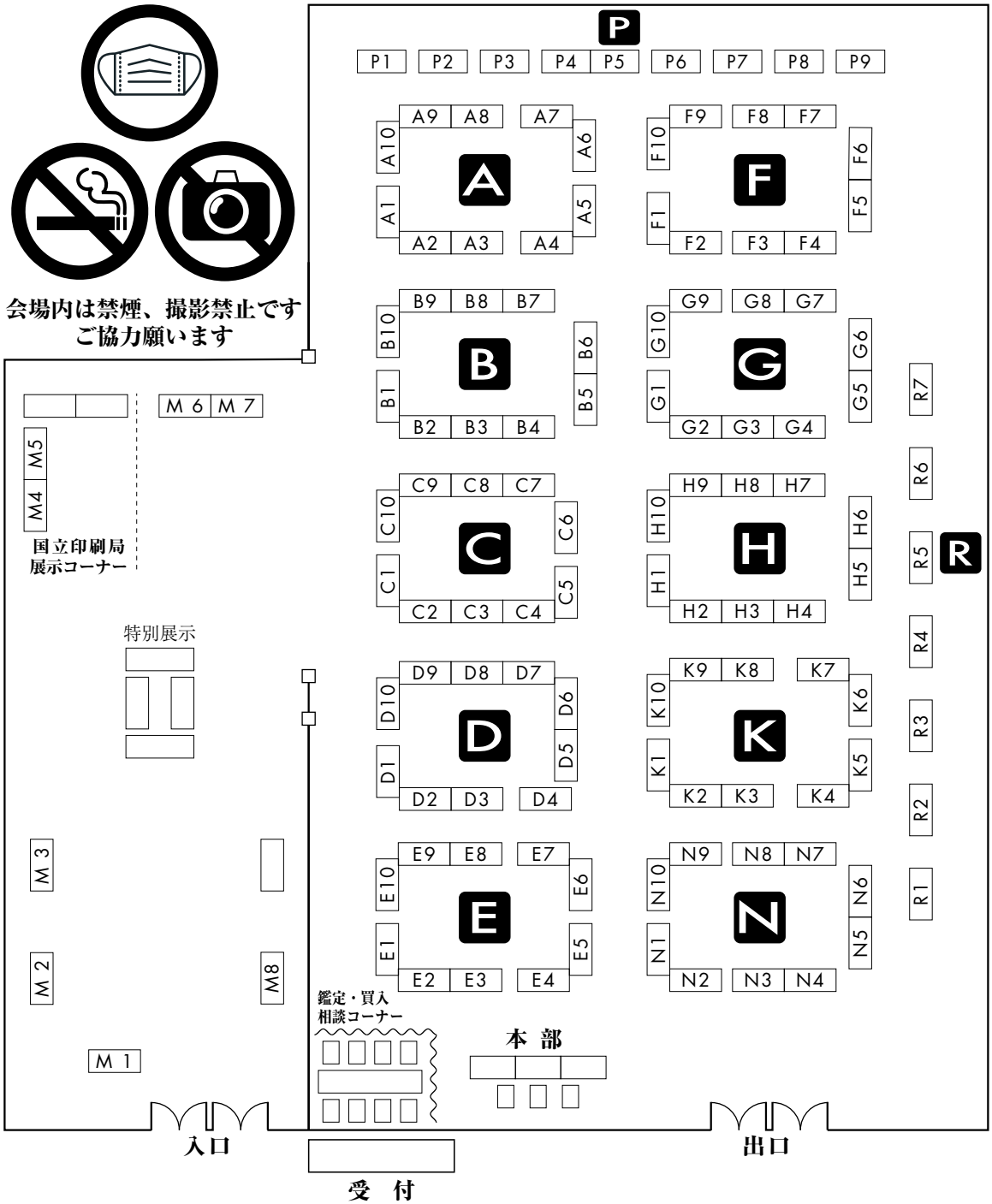
実行委員スタッフ

●大会委員長　関口　寧　Yasushi Sekiguchi
●実行委員長　髙馬　大三　Daizo Koma
●実行委員（順不同）
林　和実　Kazumi Hayashi
寺田　実　Minoru Terada
矢澤 幸一郎　Koichiro Yazawa
竹内　潤　Jun Takeuchi
野﨑　祐一　Yuichi Nozaki

第33回東京国際コイン・コンヴェンション

出展業者のブース案内図／ EXHIBIT AREA INFORMATION

※新型コロナウイルス感染症対策のため、出入口は一方通行にご協力下さい。



第33回東京国際コイン・コンヴェンション 参加社名 TICC

◎造幣局関係

独立行政法人 国立印刷局	National Printing Bureau, Japan	M 4・5
英国王立造幣局	The Royal Mint	M 1
フランス国立造幣局	Monnaie De Paris	M 3
中国金幣集団有限公司	China Gold Coin Group Co., Ltd.	M 8
シンガポール造幣局	The Singapore Mint	M 2
一般財団法人 印刷朝陽会	Insatsu - Choyokai	M 6・7

◎海外参加社

ピー・シー・ジー・エス（香港）PCGS	C 6
ソブリンレアリティーズ（英国） Sovereign Rarities Ltd	P 6
エディションズ・ヴィ・ガードゥリー（モナコ） Editions V. Gadoury	P 7
ニューセンチュリー・コインズアンドノート（香港） New Century Coins & Notes	P 9
スティーブン・アルバム・レア・コインズ（米国） Stephen Album Rare Coins	P 8
シュールマン／ミントコンパニエ（オランダ／スウェーデン） Schulman B.V. ／ Myntkompaniet	R 7
エヌジーシー・エヌシーエス・ピーエムジー（香港） NGC-NCS-PMG	D 4
キュンカー・オークション（ドイツ） Fritz Rudolf Kuenker GmbH & Co. KG	R 6
シージービー・ヌミスマティクス・パリ（フランス） CGB Numismatics Paris	R 5
スピンク（香港）Spink	R 4
エムディーシー・モネ・ド・コレクション（モナコ） MDC Monnaies de Collection	R 3
ヘリテージ・オークションズ（米国） Heritage Auctions	R 2
トリゴメトリック・エス・ディー・エヌ・ビー・エーチ・ディー・アンド・トリゴメトリック・リミテッド（マレーシア） TRIGOMETRIC SDN. BHD. & TRIGOMETRIC LIMITED	R 1

◎国内参加社

アカデミー商会	Academy Shokai, Co.Ltd.	C 7～10
アベノスタンプコイン社	Abeno Stamp Coin Co.	G 7・8
アローインターナショナル	Arrow International Co. Ltd.	K8～10
アンティーリンク	Anty Link Inc.	F 7・8
ヴァンガードコイン	Vanguard Coin	A 4・5
薄井美術店	Usui Bijyutsu ten	G 9・10
永楽堂	Eirakudou	P 3
駅前コイン	Ekimae Coin Co.	K 1～3
カードショップトレジャー	CardShop Treasure	F 1・2
銀座コイン	Ginza Coins Co.	H 7～10
銀座ステラ	Ginza Stella Co. Ltd.	E 4・5
ケネディ・スタンプ・クラブ	Kennedy Stamp Club Inc.	H 1～4
コレクションハウス	Collection House	D 1～3
城南堂古美術店	Jhonando Kobijyutsu Ten	A 6・7
新橋スタンプ商会	Shinbashi Stamp Co. Ltd.	G 1～4
杉本梁江堂	Sugimoto Ryokodo	F 3・4
世界コイン	World Coins	P 4・5
セキグチ	Sekiguchi	B 7～10
世田谷スタンプコイン	Setagaya Stamp Coin	F 5・6
泰星コイン	Taisei Coins Corp.	D 5～10
大盛スタンプコーナー	Taisei Stamp Corner	K 4・5
大日スタンプ・コイン	Dainichi Stamp Coin	K 6・7
ダルマ	Daruma International Galleries	B 1～4
寺島コイン	Terashima Coin	N 1・2
日郵コイン	Nichiyu Coin	N 5・6
ネットジャパン	Net Japan co.LTF	N 9・10
野崎コイン	Nozaki Coin	A 1～3
八王子ムササビコイン	Hachioji MUsasabi Coin	H 5・6
ファミリースタンプ	Family Stamp	E 6・7
フクオ	Fukuo	B 5・6
フクオスタンプ社	Fukuo Stamp Co.	N 3・4
松浦古銭堂	Orient Coin Center	N 7・8
ミントミントオークション	Mint Mint Auction	G 5・6
モリシタ	Morishita	E 8～10
大和文庫	Yamato Bunko	F 9・10
ユキオスタンプ	Yukio Stamp Co. Ltd.	E 1～3
ワールドコインズ・ジャパン	World Coins Japan	C 1～5
ワタナベコイン	Watanabe Coin	A 8～10
公博 GBCA	GBCA	P 2
書信館出版	Shoshinkan Publication Co. Ltd.	P 1
日本貨幣商協同組合	Japan Numismatic Dealers Association	本部

東京国際コイン・コンヴェンションでは毎年多くの海外造幣局、ディーラーのご出展を頂いておりますが、新型コロナウイルス感染症に関する水際対策措置（ビジネストラック・レジデンストラック等の一時停止）の影響もあり、出展数が減少しております事をお知らせいたします。

第33回東京国際コイン・コンヴェンション 特別展示品 TICC

「円誕生」と銘打った特別展示です。
全国の収集家のコレクションが一堂に集まります。
国内最大の東京国際コイン・コンヴェンションならではの、豪華な展示となりました。

1. 明治3年銘菊桐旭日竜試作貨セット

近代日本貨幣の創造期における歴史的な試作貨セットを特別展示いたします。近代貨幣の極印は当初、イギリスに発注の予定であった為、加納夏雄らにより見本貨が製作され、英国王立造幣局へ送付されました。その見本貨を基に、英国の有名な彫刻家レオナード・ワイオンにより製作されたのが今回展示の試作貨セットです。8枚全てが当時の素晴らしい状態のまま完璧に保存されており、現存はわずか2組のみと言われています。滅多にお目見えすることのない稀少な逸品です。この機会に是非ご覧ください。

2. 円誕生 一円銀貨・貿易銀 名品の数々

一円銀貨・貿易銀の稀少銘柄や完全未使用状態等、入手困難な名品の数々が勢揃いします。展示品は造幣局所蔵品と全国の収集家のコレクションです。併せて 1952年ヘルシンキ大会から2022年北京オリンピック大会まで世界各国の歴代オリンピック記念貨幣を多数展示いたします。

第33回東京国際コイン・コンヴェンション 企画品 TICC

今年の「東京国際コイン・コンヴェンション貨幣セット」の販売はございません。

一円銀貨・貿易銀収集図鑑

ご来場のお客様に
無料進呈いたします！

「日本貨幣カタログ」の分類に合わせて作成したもので、図版を豊富に記載し、非常にわかりやすくチェックできるようになっています。

※写真は参考です、実際のデザインとは異なる場合がございます。

国立印刷局

今年で31年目の発行

TICC第31回・第32回記念
スーベニアカード

詳しくは P11 をご覧下さい。 **¥1,300**（税込）

入場者全員の中から抽選で豪華賞品が当たります

期間中、入場者全員の中から抽選で豪華賞品をプレゼント！応募用紙は、入場用紙またはダイレクトメールに同封されている住所確認表です。

●TICC 金賞 2名様

旧1円金貨 日本貨幣商協同組合組合鑑定書付

●TICC 銀賞 5名様

近代通貨制度150周年記念千円銀貨幣

●TICC 銅賞 10名様

第33回 TICC 記念クオカード

※抽選結果は後日、発送をもってかえさせて頂きます。

※画像はイメージです。

チャリティーくじの開催方法変更のお知らせ TICC

毎年開催しております、会場内でのチャリティーくじは、新型コロナウイルス感染対策の為、後日抽選をする形に変更となります。参加方法は下記の通りとなりますことをお知らせいたします。ご理解の程お願い申し上げます。

1, 本部にてチャリティーくじの抽選用紙を受け取る。
その際寄付をお願いしております。
2, ご住所、お名前等を記入の上、抽選箱へ投函してください。
3, 後日、当選の方には賞品を発送させて頂きます。

チャリティーくじ 応募用紙の引き換え時間

29日（金・祝）	13:00 ～ 17:00
30日（土）	12:00 ～ 17:00
5月1日（日）	12:00 ～ 16:00

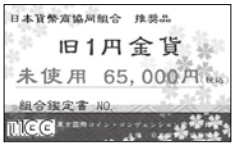
第33回東京国際コイン・コンヴェンション 特別販売品 TICC

旧１円金貨

※写真はイメージです。

明治４年に公布された新貨条例に基づいて発行された金貨です。
貨面が小さいため、旧金貨で唯一、竜図の代わりに「一圓」の文字が採用されています。裏図案は中央に日章、左右に日月を描いた錦の御旗、上下に菊と桐の紋を置いた華やかなものとなっており、名工 加納夏雄の妙技が遺憾なく発揮されています。
未使用品のものに日本貨幣商協同組合推奨プレートをお付けしております。

[200% 拡大図]



プレート付

未使用
日本貨幣商協同組合鑑定書付
65,000 円（税込）

旧１円銀貨

※写真はイメージです。

対外貿易専用貨幣として発行された銀貨です。
迫力のある大きさと天皇の象徴である竜図、太陽の図である旭日の図案が人気の一品です。
美品以上のものに日本貨幣商協同組合推奨プレートをお付けしております。

プレート付

美品
日本貨幣商協同組合鑑定書付
50,000 円（税込）

新1円銀貨 並年

※写真はイメージです。

明治７年より一円銀貨のデザインが変更され、大正３年銘まで発行されました。 大型･小型の２種があり外地でのみ通用した丸銀打の他、同じ年号でありながら 細部に違いのある手替わり等バリエーションが豊富で収集人気が高い銀貨です。

美品
13,000 円（税込）

1964 東京五輪千円銀貨・百円銀貨２点セット

※写真はイメージです。

日本最初の記念コインとして人気の高い千円銀貨と百円銀貨の２種類をセットにしてご提供いたします。
昭和３９年の東京オリンピックイヤーに発行され、貨幣収集ブームのきっかけとなった記念コインです。

2,500 円（税込）

大切なコレクションに**鑑定書**をつけませんか？

鑑定を依頼する

日本貨幣商協同組合には、皆様のお手持ちの貨幣に鑑定書を発行する鑑定委員会がございます。
この鑑定書は、収集用貨幣に関する**我が国で唯一の公式な鑑定書**です。
貨幣の正しい評価やコレクション充実の為、また次世代に受け継ぐ為に大切なコレクションに鑑定書をお付けになる事をお薦めしております。
鑑定書発行の受付は全国の組合加盟店でご相談下さい。

鑑定書見本
（日本貨幣商協同組合オリジナルケース入）

鑑定書が発行されるまでの流れ

鑑定書発行を組合加盟店へ依頼する
まずはお近くの加盟店へお問い合わせください。

鑑定する貨幣を預ける
お預かりした貨幣は、日本貨幣商協同組合へ届けられます。

鑑定委員会にて貨幣を鑑定
貨幣のスペシャリストが集まる鑑定委員会があなたの貨幣を鑑定いたします。

貨幣の真贋、評価を鑑定委員会で決定
国内で最も信頼度の高い鑑定基準によってあらゆる角度から検証。真贋、評価を決定します。

鑑定書の発行
鑑定委員会により、真正品と評価された場合、鑑定書が発行されます。この鑑定書は、収集用貨幣に関する我が国で唯一の公式な鑑定書となります。

お客さまの元へ鑑定した貨幣を返却、鑑定書のお渡し
鑑定書の発行により、あなたの貨幣の価値が公式に証明されました。貨幣と合わせて、どうぞ大切に保管してください。

※鑑定書発行にかかるお時間は、２週間～２ヶ月となります。その間、鑑定する貨幣はお預かりさせていただきます。

鑑定書を発行出来ない貨幣の一例

・日本で発行されていない貨幣（外国貨幣など）
・現在の法定通貨として通用している貨幣（現行貨幣）＜例：記念コイン、通常の流通貨幣、廃貨になっていない昔のお金など＞
・現状の状態が著しく劣化している貨幣や、加工してあるもの
・修正品など

鑑定書料金表

	鑑定品の価格（時価）		鑑定料（税込）
1.	100,000円未満	（10万円を含まず、以下同じ）	5,500円
2.	100,000円以上	500,000円未満	11,000円
3.	500,000円以上	1,000,000円未満	16,500円
4.	1,000,000円以上	2,000,000円未満	33,000円
5.	2,000,000円以上	5,000,000円未満	55,000円
6.	5,000,000円以上	10,000,000円未満	110,000円
7.	10,000,000円以上		165,000円

※なお、にせ物、鑑定不能品については申し込み手数料として1品につき5,500円（税込）を申し受けます。
日本貨幣商協同組合には皆様のお手持ちの貨幣に鑑定書を発行する鑑定委員会がございます。この鑑定書は収集用貨幣に関する、我が国で唯一の公式な鑑定書です。貨幣の正しい評価やコレクション充実のため、お手持ちの貨幣に鑑定書をお付けになることをお薦め致します。詳細やお申込みは組合加盟店でご相談下さい。

※デジタル鑑定書（NFT鑑定書）カードの発行には、別途手数料がかかります。

日本初、ブロックチェーン技術による貨幣の「デジタル鑑定書（NFT 鑑定書）」

Japan’s First “Digital Authentication (NFT Certification)”

日本では 2021 年度の流行語大賞にノミネートされた「NFT」という単語ですが、海外では大賞を受賞いたしました。世界的に非常に注目度が高い技術です。

デジタルでありながら「コピーがつくれない」、言いかえれば「偽造ができない」データ、それが NFT（非代替性トークン）です。

この技術を用いて、日本貨幣商協同組合は 2022 年 4 月からデジタル鑑定書の発行に踏み切りました。

デジタル鑑定書は、一見すると普通のプラスチックのカードにしか見えません。ですがスマホやタブレットにかざすことで、証明すべき商品の画像、鑑定書データなどを見ることができます。

デジタル鑑定書は、商品の偽造防止、真贋判定に大きく役立ちます。環境問題も併せて、デジタル化の流れは急速に進んでいます。

日本貨幣商協同組合は、業界に対し責任ある立場から、鑑定書のデジタル化への先鞭をつけることにいたしました。

日本貨幣商協同組合は、持続可能な開発目標（SDGs）の向上に向けた取組みの一環として、これを大きな一歩と考えております。

The word "NFT" was nominated for the 2021 buzzword award in Japan, but it won the grand prize overseas. It is a technology that has received a great deal of attention worldwide. NFT (Non-Fungible Token) is digital data that "cannot be copied"; in other words, it "cannot be forged".

Using this technology, the Japan Numismatic Dealers Association began issuing digital authentication in April 2022. At first glance, a digital certificate looks like an ordinary plastic card. However, by holding it over your smartphone or tablet, you can see the image of the product to be certified, the certificate data, etc.

The digital certificate is beneficial for preventing counterfeiting of products and determining authenticity. Along with environmental issues, the trend of digitalization is advancing rapidly.

The Japan Numismatic Dealers Association has decided to take the initiative in digitizing the certificate from a responsible position for the industry. The association considers the initiative a significant step in its efforts to attain the Sustainable Development Goals (SDGs).

■ デジタル鑑定書（NFT 鑑定書）
鑑定委員会による我が国唯一の公式な鑑定書を発行

■ IC タグ付きブロックチェーン「NFT 鑑定書」
お手元のカードにスマホやタブレット端末「をかざすだけで、商品の NFT 鑑定ページが表示され、いつでも証明内容を確認することができます。

デジタル鑑定書（NFT 鑑定書）の説明ブースをホワイエ会場（入口はいって右手）に設けております。
We will set up a booth foyer, explaining the digital authentication (NFT certificate) system.

TICC2022　特別講演　ロイヤルパークホテル3階クラウンルーム TICC

特別講演、収集家団体のセミナーへご参加の皆様へ

新型コロナウイルス感染症対策の為に、会場内では入口にて検温、マスクの着用をお願いしております。また、会場内では大きな声での会話を控えて頂きますようお願い致します。
特別講演においては、会場内の密を避けるため、参加人数を調整させて頂く場合があります。また、収集家団体のセミナーも同様に、混雑具合により調整させて頂きますので、ご理解の程お願い申し上げます。

4月29日(金･祝)
14:00～15:30

「円銀が来た道」

松山大学名誉教授
岩橋　勝(いわはし　まさる)

【略歴】
1941年生まれ。1967年大阪大学大学院経済学研究科中退、1983年経済学博士(大阪大学)。大阪大学経済学部助手を経て、1969年松山商科大学(現、松山大学)赴任、教授を経て2012年退職。この間、社会経済史学会理事、貨幣史研究会代表などを歴任。
【主要著作】
『近世日本物価史の研究』(大原新生社、1981年)、『日本のお金の歴史　江戸時代』(ゆまに書房、2015年)、『近世貨幣と経済発展』(名古屋大学出版会、2019年、第18回徳川賞)、編著に『貨幣の統合と多様性のダイナミズム』(晃洋書房、2021年)など多数。

4月30日(土)
13:00～15:30(2部制)

「B券からC券シリーズまでの日本銀行券の歩み」
「D券シリーズに採用された偽造防止技術など」

紙幣研究家、
一般財団法人印刷朝陽会　事務局長
植村　峻(うえむら　たかし)

【略歴】
昭和10年生まれ、昭和33年都立大学卒業、大蔵省印刷局勤務、平成元年大蔵省印刷局滝野川工場長、平成3年印刷局業務部長、平成6年退職、平成10年(財)印刷朝陽会専務理事、平成19年(財)印刷朝陽会事務局長･調査研究部長
【主要著書】
「世界の銀行券」(印刷局朝陽会、1987年)、「日本紙幣の凹版彫刻者たち」(印刷朝陽会、2010年)、「お札のはなし」(印刷朝陽会、2015年)、「日本切手の凹版彫刻者たち」(日本郵趣協会、2015年)、「紙幣肖像の近現代史」(吉川弘文館、2015年)、「日本紙幣の肖像やデザインの謎」(日本貨幣商協同組合、2019年)、「贋札の世界史」(角川書店、2020年)など多数

収集家団体の有志によるセミナー　ロイヤルパークホテル3階クラウンルーム TICC

4月29日(金･祝)
16:00～17:30
「安南銭の収集の楽しみ方」　日本貨幣協会
【内容「安南銭美旗大鉄」の収集を通して学んだベトナムの歴史と社会を紹介します。

4月30日(土)
16:00～17:30
「見て楽しむ外国コイン」　外国コイン研究会
【内容】有志会員による一押しコインを展示し、コイン収集のテーマや着眼点、楽しみ方を解説します。

5月1日(日)
14:00～15:30
「講演:コイン収集の楽しみ方と収納方法、よろず相談会34」　日本近代銀貨研究会
【内容】近代銀貨なんでも相談、旧円銀&貿易銀の最新手変り紹介と手変り入門資料配布致します。

日本貨幣商協同組合主催催事スケジュール

●大　阪	**「第20回大阪コインショー」**	会 期:6月17日(金)～19日(日) 場 所:OMMビル2階Aホール
●名古屋	**「第4回名古屋コインショー」**	会 期:9月3日(土)～5日(月) 場 所:ウインクあいち6F 展示場
●大　阪	**「第53回おおさか大収集まつり」**	会 期:9月30日(金)～10月2日(日) 場 所:心斎橋御堂筋ビル9F
●東　京	**「第20回東京コインショー」**	会 期:11月11日(金)～13日(日) 場 所:大手町サンケイプラザ3F

○催事案内ご希望の方は、組合までお葉書でお申込み下さい。
東京都港区新橋2-16-1ニュー新橋ビル409
TEL.03-3508-1701　FAX.03-3593-1029

円銀が来た道

（松山大学名誉教授）岩橋　勝

はじめに

「円銀」とは1871(明治4)年5月公布の新貨条例に先だつ前年、対外貿易専用に1874年以降図柄を変えて鋳造・発行した「新1円銀貨」と区別するためにつけられた旧1円銀貨の名称です。

この1円銀貨の誕生には、当時の新政府の迷走ぶりがいろいろと現れています。

まず、①「円の誕生」は1871年とされていますが、「円銀」表面をよく見ると「明治3年」と刻印されています。いったいなぜ円貨を正式に発行する前の年号を明示したのでしょうか。そして、明治維新とともにすべてが「一新」されたわけではなく、明治改元後しばらくは一般の取引において旧幕府時代の「両・分・朱」の単位が使われたことはよく知られていますが、そもそも「円」呼称はいつからどのようにして始まったのでしょうか。

②明治の貨幣制度が始まる前の江戸期幣制＝三貨制度のもとでは、17世紀初めころこそ金貨と銀貨がバランスよく流通していましたが、17世紀半ばまでには急速に銀貨が大量流出し、さらに18世紀後半期からは少なくなった銀貨を鋳潰して「銀製金貨」（その先駆けが1772年発行の「南鐐二朱銀」）を発行拡大して行きましたので、幕末までには国内で流通する金銀貨の比率は大半が「金貨」のみと言ってよい状況となっていました（表1）。にもかかわらず、近代国家の出発時に中軸貨幣として、なぜ銀貨が選択されたのでしょうか。

③近代貨幣制度の始まりとなる「新貨条例」公布は1871年でしたが、じつは明治改元期（1868年9月8日）より新政府は経済政策の基本となる新貨幣制度の在り方を検討しており、翌1869年にはすでに銀本位制でいこう、という方針を固めていました。ところが、その方針により進めていた新制度実施直前になって、急遽、金本位制実施に転換しています。このような重要な方針をなぜ変更しなければならなかったのでしょうか。

旧1円銀貨

新1円銀貨

写真1

表1　徳川期金銀貨構成の推移

改鋳開始年	金　貨	計数銀貨	秤量銀貨	合　計
年	千両	千両	千両	千両
1695（元禄8）	10,627（66）		5,467（34）	16,094（100）
1710（宝永7）	15,050（58）		10,755（42）	25,805（100）
1714（正徳4）	19,405（52）		18,120（48）	37,525（100）
1736（元文1）	10,838（52）		10,204（48）	21,042（100）
1771（明和8）	19,114（68）		8,600（32）	27,714（100）
1818（文政1）	19,114（66）	5,933（20）	4,208（14）	29,255（100）
1832（天保3）	23,699（52）	16,804（36）	5,361（12）	45,864（100）
1858（安政5）	28,315（54）	20,536（39）	3,902（7）	52,750（100）
1869（明治2）	74,321（57）	52,392（41）	2,344（2）	129,057（100）

出典：岩橋勝『近世貨幣と経済発展』名古屋大学出版会、2019年。

注：1 金銀貨流通量カッコ内は構成比率。
　　2 秤量銀貨両建て換算は、1858年まで60匁、1869年は90匁替え。

以上の3つの疑問点をあきらかにするには、どうしても日本を取り巻く東アジアの動向のみならず、ヨーロッパやアメリカ大陸の銀をめぐる歴史的状況にも目を移さなければなりません。今回はそうしたグローバルな事情から「円銀誕生」にいたる経路をたどってみましょう。

1　円銀の素材はどこからまかなわれたか

1871年2月に開業式を挙げた大阪造幣局（当時は「造幣寮」）は、すでに旧幕末期の1866年に英米ら4国と結んだ改税約書に基づいて、金座・銀座に代わる政府直轄の金銀鋳造所設置の方針が決められており、新政府がその方針を継承して68年より工場建設に着手していました。その設置場所は明治政府の直轄諸施設のうちでは唯一といってよい、東京以外の大阪でした（その理由は、京都から遠隔で、旧勢力が周辺に多く残存する東京ではなく、より近くて安全な大阪に新しい都を・・という議論が新政府内に当時あり、大久保利通が強く推したといわれています）。開業の前年秋には銅貨や銀貨の試鋳ができるようになり、いつでも操業できる状況にありました。71年5月に公布する新貨条例に合わせて準備された金銀貨のうち、もっとも鋳造枚数の多かったのが旧1円銀貨の368万枚余、ついで旧10円金貨の186万枚余でした。金額的には10円金貨の方が多かったわけですが、量目（大きさ）は1枚あたり1円銀貨の方が6割余も多かったので、新鋳造にあたりその素材をどのように獲得するかということが問題となります。

新通貨鋳造にあたり、通常は政府（幕府）蓄蔵の地金を使用するか、旧通貨を回収してそれを鋳潰して新しく鋳造するのですが、政権を奪取したばかりの新政府に貯蔵地金はなく、旧通貨を改鋳する余裕もありませんでした。とくに、銀貨の場合、旧幕府時代に改鋳するさいの主要な方式であった、品位を落として、その改鋳差益で改鋳費用をひねり出すということがすでに限界に達していたのです。そして、何よりも当時の日本をとりまく東アジアの状況から、銀貨については品位が90%近く、量目も相応の重さがあった洋銀（メキシコドル）を下回らないものを鋳造しなければなりませんでした。いわば、洋銀に代わり、それを超える国内の基軸通貨として1円銀貨が求められたのです。

当時の国内流通の主流通貨は万延二分金と一分銀でしたが、この2種は維新後も新政府によって暫定的に増鋳されるほど国民に定着していました（表2）。円銀の鋳造源として期待される、江戸時代の銀貨の中軸であった秤量銀貨である丁銀・豆板銀はすでに微量しか残っておらず、しかもその大半は民間の商家や富農層で退蔵されていました。他に期待される計数銀貨は一分銀だけでも純銀量にして1,000トン以上も流通していましたが、これでも通貨不足気味で、回収して改鋳素材にすることは困難でした。では、旧1円銀貨は何を素材に新鋳されたのでしょうか。

旧1円銀貨鋳造量は記録によるかぎり、3,685,049枚となっており、その純銀量は90トン足らず（品位90%、1枚量目26.96g）にすぎません。当時の国内秤量銀貨残高（推計で純銀量にして約195トン）をある程度回収できれば新鋳可能でしたが、急速な対応が求められており、結局は第3の素材獲得が求められたと考えられます。その素材こそ、幕末期に金銀比価の大きな開きから大量に流出した金貨（おもに、天保小判・一分判）と引き替えに流入した洋銀でした。

すなわち、安政開国（1859年）と同時にそれまで民間では禁じられていた外国貿易がはじまりますが、当初外国商人が目を付けたわが国の商品は、生糸でも茶でもなく、金貨でした。当時の東アジアでは金銀比価が3世紀くらいにわたっておおむね1：15くらいで推移したのに対し、17世紀前半における国内銀貨の大量流出と銀山の枯渇化、その後200年余り続けられた「鎖国」政策により、開国期ころには1：5くらいにまで、日本が金安、銀高となっていたのです。この金銀比価の動きは、三貨制度のもとでの小判と丁銀との交換相場と理解されやすいのですが、実際は当時おもに流通していた天保小判と天保一分銀に含まれる純金と純銀の交換相場

表2　旧制金銀銭貨流通概額（明治2年現在）

種　　別	旧 貨 幣 額	新貨に換算した額
金　貨		87,610,652円805
天保二朱判	7,444,638両3分2朱	22,147,309円307
安政小判・一分判	74,170両1分	264,998円065
安政二分判	2,110,129両	4,093,911円916
万延大判	17,097枚	492,904円458
万延小判・一分判	625,050両	831,020円851
万延二分判・二朱判 明治二分判	53,240,576両	59,105,531円232
＊　うち明治二分判	（3,201,643両2分）	
＊明治劣位二分判	608,000両	674,976円976
銀　貨		68,275,313円023
天保一分銀	11,010,100両	15,609,525円230
嘉永一朱銀	9,952,800両	12,034,657円034
安政丁銀・豆板銀	79,051貫	1,608,525円230
安政一分銀	28,379,600両	36,146,358円650
安政二朱銀	6,700両	25,466円499
＊明治亜鉛差一分銀	1,066,833両2分	1,358,798円091
＊明治吹継一朱銀	1,171,400両	1,491,981円724

でした。つまり、一分銀は 4 個で小判と交換できるわけですが、当時の小判に含まれる金は 6.4 g、一分銀 4 個に含まれる銀は 34.1 g でしたから、金銀比価が、1：5.3 となるわけです。（写真 2）

洋銀 1 枚は開国前の外国との貨幣交換協定により一分銀およそ 3 個とされました。国外では洋銀 4/3（一分銀 4 個）枚で交換できる金は 2.3 g前後にすぎなかったので、だれが考えても洋銀を日本に持ち込み、一分銀と交換し、その 4 枚で小判を求め、海外でふたたび洋銀と交換すれば当初の洋銀がおよそ 3 倍の価値をもつようになることはあきらかでしょう。このようにして大量の小判が流出したのですが、その量は 80 万両とも 150 万両とも推計されています。かりに 100 万両も流出したとすれば、対価として流入した洋銀は 133 万枚、含有銀量はおよそ 32 トンになります。旧 1 円銀貨新鋳素材にするにはまだ不足ですが、じつは金貨以外の生糸・茶等の輸出品対価として流入した洋銀も相当にありました。幕府や諸藩がこの時期輸入した戦艦・武器の支払いにあてられて相殺された分もありますが、記録によるかぎり、開国後 1867 年までの 14 年間はかわらず出超だったため、この間に国内で蓄積された洋銀はかなりなものであったと考えられます。このように、旧 1 円銀貨創鋳に直面して、新政府が鋳造源にあてたのは、国内流通の銀貨よりも、幕末期に大量流入した洋銀が中核となったわけです。

写真 2　メキシコドル（洋銀）

2　19 世紀以前の世界の銀流通事情

近代日本経済の基盤となる円銀が、かつて世界有数の銀産国でもあったわが国内の銀ではなく、洋銀（メキシコドル）であった事情を検討する前に、世界における銀流通の歴史を簡単に見ておきましょう。

銀は BC3000 年ころより人類が使用するようになったといわれ、古代での利用され始めでは金よりも高価でした。古代エジプト・インドでは金の素材に銀メッキされた装飾品が確認されており、これは金が自然金で採取できたのに対して自然銀はまれで、一定の精錬法があみだされるまでは利用量が限られていたためです。それでも古代ギリシャのころにはアテネで銀山が開発されるなどして有力ポリス国家台頭の要因となっています。ローマ帝国期には中東～地中海でドラクマ貨が広く流通するようになり、小額のデナリウス銀貨やイスラム世界ではディルハム銀貨も紀元前後期にあらわれ、それらの名称が地域によっては現代でも貨幣単位として使用されています（写真 3）。

テトラドラクマ銀貨
Tetradrachm (Shilver)
古代ギリシャ　紀元前 449 ～ 413 年
Athenes, Ancient Greece 449 ～ 413B.C.
23 × 24mm

デナリウス銀貨
Denarius (Shilver)
古代ローマ　紀元前 140 ～ 135 年
Ancient Rome 140 ～ 135B.C.
直径 (Diam.)19mm

写真 3

古代いらい銅銭中心であった中国は 13 世紀にモンゴル帝国に吸収されて台頭し、東西ユーラシアの政治・経済統合をはかった以降、銀建て決済も並行して行うようになり、世界的に銀不足にも直面するようになりました。しかし、同帝国崩壊後の 14 世紀以降は世界史的な経済拡大は 16 世紀まで待たねばなりません。16 世紀半ばにおける南米ポトシ銀山とわが国石見銀山がその後の活況を開いたとされています。ただし、その扉を開いたのはやはりヨーロッパ人で、1518 年ボヘミア（現チェコ）のヨアヒムスターラ―と呼ばれる大型銀貨の鋳造開始が画期となります。15 世紀末以降、フッガー家が南ドイツ銀山を手がけた勢いの延長とされています。（ちなみに、上述「ターラー」は現代国際通貨「ドル」呼称の淵源）

1545 年に現ボリビアの原住民によって発見されたポトシ銀山（写真 4）は、採掘総量の規模からその後の世界の銀流通と用途を大きく変えるものでした。金にくらべて採掘に手間を要する銀でしたが、スペイン人は新大陸で混汞法という水銀を用いた精錬法で効率的に産出高を上げたからです。（この水銀使用のため、採掘に従事した先住民族の多くが中毒のため落命した歴史も・・。ただし、ポルトガル人が開発した灰吹き法によって 1533 年から採掘のはじまる石見銀山では、こうした中毒とは無縁でした。）ポトシ銀は最盛期（1581-1600

年）には当時の世界産高の半分以上を占める年間平均 254 トン産出という推計もあります。19 世紀初頭に主流となるメキシコ銀も 1497 年より採鉱は始まっていますし、石見銀山を中軸とするわが国産銀も 1600 年ころには年間 200 トンを超えたとの研究もあって（小葉田淳 1968）、銀が得られにくかった日本以外の世界において装飾品や生活用具、あるいは国際通貨として銀が広く用いられるようになります。

ポトシ銀山より歴史の古いメキシコ銀山は大平洋沿いの山脈に多数存在し、とくに首都メキシコシティーの西北西約 600km 離れたサカテカス銀山（写真 5）と、その中間部にあるグアナファト銀山が知られています。当初は南米銀とともにピラドールといわれるスペイン銀貨（写真 6）として作られていましたが、1821 年にメキシコが独立すると、鷲をデザインしたものに変えられ、19 世紀末まで「メキシコドル」として世界で広く流通するようになります。そのようになった理由は、それが 16 世紀の当初からスペインの 8 レアル銀貨の標準である 1 枚約 27g、品位 90%に合わせて作られ、古くより国際通貨として安定的に使われていた経緯がありました。19 世紀末にかけて、その量目・品位は 1 ～ 3%ほど低落することもありましたが、後述のように同時期のアメリカ、日本、中国などがグローバル化する際の独自通貨鋳造の際の基準となって行きます。なお、メキシコドルは 19 世紀にかけて約 35.5 億ドル鋳造されたといわれ、これによれば素材としての銀はおよそ 8 万 6 千トン（新大陸最盛期年間産銀量およそ 400 トンの 200 倍以上！）もがあてられたことになります。

わが国の銀山はすでに古代より対馬で銀採掘の記録はありますが、陸奥などの金にくらべるとはるかに少量でした。16 世紀前半より、各地戦国大名による銀山開発が進み、徳川幕府は慶長小判（1,400 万両）とともに慶長丁銀・豆板銀（120 万貫目）を基準銀貨として大量に鋳造します。この慶長銀を当時の公定相場 1 両＝50 目で換算すると 2,400 万両となり、あきらかに当時、国内で銀が潤沢に流通していたことがうかがわれます(60 目換算でも、2,000 万両)。慶長銀以外にも各地で領国銀（写真 7　出羽窪田銀）といわれる大名独自の銀貨や、灰吹き銀（写真 8　石州銀）といわれる精錬時の素材のまま（したがって、ほとんど純銀）での銀流通も見られますので、幕府公定金銀相場 50 目はなかなか守られず、当初より後の基準相場となる 1 両＝ 60 目前後であったよ

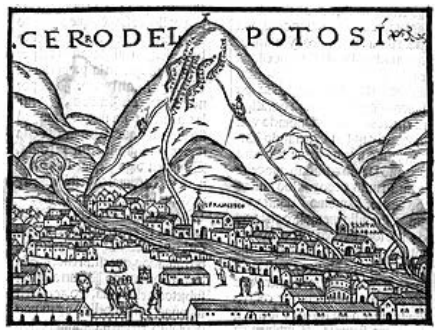


写真 4　16 世紀ポトシ銀山

写真 5　エデン鉱山 サカテカス銀山

写真 6　スペイン銀貨 1768 年

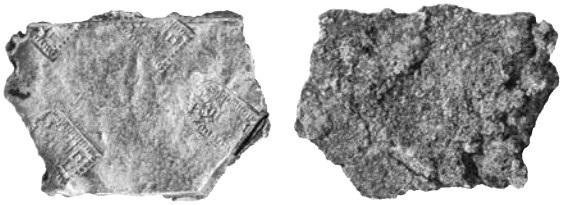


写真 7　出羽窪田銀

写真 8　石州銀

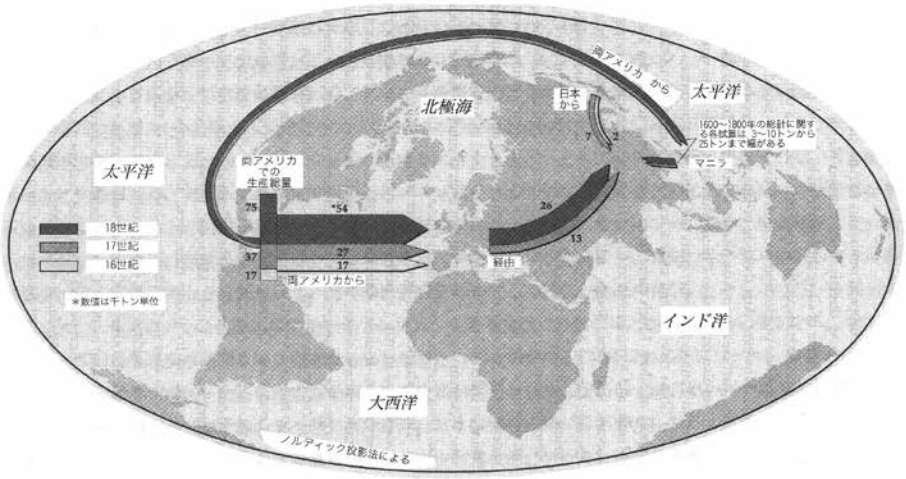


図1　17-8 世紀 世界の銀流通

うです。幕府金銀貨の時期別構成比率は表 1 に示したとおりですが、同表では示していない 17 世紀には、そういうわけで金貨よりも銀貨の方がはるかに多く出回っていたはずです。ところが、統計的に明確となる元禄改鋳直前の金銀比率を見ると、銀貨が異常に少なくなっています。これはどういうわけでしょうか。

幕府による三貨制度は権力基盤が確立した関ヶ原の戦い（1600 年）後、ただちに整備されたわけではなく、領内に金銀山をもつことが許された若干の大名領で発行された金銀貨が最終的に慶長金銀貨に吸収され、寛永通宝が全国におおむね普及した寛文年間までおよそ 70 年間を要しました。また、この間に「鎖国」化をはかりましたが、慶長金銀貨は東アジアの金銀事情と無縁ではすみませんでした。一番大きな影響は、慶長銀貨の大量流出です。表 3 は 16 ～ 17 世紀中国、日本、スペイン 3 か国の金銀比価を示していますが、これにより明確なことは中国が当時つねに金安銀高であったこと、日本は 16 世紀後半より 17 世紀前半にかけて銀安が進んでいたこと、そして新大陸から大量な銀流入のあったスペインは 16 世紀後半にすでに銀安が定着し、17 世紀に入ってさらにややそれが進んだことがわかります。この 3 か国の状況を見るだけでも銀がどのように動いたか、明確でしょう。日本銀のみならず、世界の多くからの中国への銀の大量流入です。

この時期の世界における銀の動きについては、A.G. フランクによる推計がよく用いられています（図 1）。16 世紀に新大陸の植民地化を進めたスペインは、そこで翌世紀にかけて 5 万 4 千トンもの銀を採掘しました。その多くは本国に送られ、それを財源としてスペインがヨーロッパの強国となったことは世界史の授業で語られています。ただし、その後の銀の動きはさほど授業で説明されていません。本国に流入した銀の多くはスペイン王室の消費を通してヨーロッパ諸国にあふれたので、銀の価格が下落し、全域的に「価格革命」という封建諸侯等支配階級没落の要因となります。かわって台頭したのが遠隔地交易を進めた商人です。流入銀の多くはヨーロッパ内相互地域の取引にも使われましたが、当時人気の高かったアジア産品（東南アジアの香料、インド木綿、中国の生糸・絹・陶器等）にも向けられたのです。中国以外のアジア諸国では独自の産物を輸出しますが、最終的に中国産品がこれらの地域にも流入し、結果として中国にはヨーロッパから流出した銀の大半が流入することに

表3　16 ～ 17 世紀の金銀比価

	中　国	日　本	スペイン
1566	—	—	12.12
1568	6.00	—	12.12
1571	—	7.37	12.12
1572	8.00	—	12.12
1575	—	10.34	12.12
1581	—	8.92	12.12
1588	—	9.15	12.12
1589	—	11.06	12.12
1594	—	10.34	12.12
1596	7.50	—	12.12
1604	—	10.99	12.12
1609	—	12.19	13.13
1615	—	11.38	13.13
1620	8.00	13.05	13.13
1622	—	14.00	13.13
1627-44	10.00-13.00	—	13.13-15.45
1643	—	—	15.45

なります。ここで「結果として」と記したのは、中国の上記産品はヨーロッパだけでなく、インド・中東や東南アジア地域でも需要が多く、一方中国がそれら地域から必需する産品は多くはありませんでした。ために、中国産物の対価として銀が流入し、同国内で大量に滞留することになります。中国はそれらを銀貨とともに、調度品等の生活用品としても使用したので、金銀比価は 1:15 前後で安定したようです。表 3 において、17 世紀中期にかけて 3 国の金銀比価が収れんする傾向を示しているのはこうした事情の反映であったわけです。

3　円貨誕生の経路

さて、日本に話を戻して、三貨制度から「円」という呼称が基準となる新貨条例への経路をめぐっては、少なくとも二つの事案が問題となります。

その一つは、江戸期の金貨は「両」呼称が基準であったのに、明治期になぜ「円」となったのか、ということです。これについて、日銀の貨幣博物館は①中国で円形銀貨を「銀円」「洋円」と称していたのを援用、②新貨幣の形状を円形に統一したため、③銀貨の名称を「円」と称している香港に設置されていたイギリス造幣局機械を譲り受けため、というように諸説あることを紹介しています（同館『常設展示図録』）。これに対し、『円の誕生』著者の三上隆三氏はさらに絞り込んで、「円」呼称としなければならなかった必然性から説明しています。それはつぎに紹介する、新貨幣制度がたんなる「両」金貨本位制の延長ではないことを示すねらいと結びついていました。つまり、わが国の円貨は基本的にはメキシコドル（洋銀）や香港ドルとほぼ同一の価値をもつ鋳貨とせざるをえなかったとしても、「銀円」については「元」呼称が主流であった中国とは異なるもの、そしてすでにペリー来航前後には国内一部知識人の間で「両」の別称・私称・戯称として用いられていた「円」呼称が 1869 年 7 月以降に公文書で使用されるようになっていました。旧 1 円銀貨が新貨条例公布に先だつ「明治三年」と刻印されたのはけっして早とちりではなかったというわけです。

もう一つの事案は、貨幣呼称の問題にとどまらず、制度の中身の連続性です。表 1 でもあきらかなように、江戸期流通貨幣は幕末に向けて大半が「金貨」となり、「両」金貨本位制に収れんしていったといわれることが多いのですが、1871 年 5 月公布の新貨条例に向けて政府内で検討され、前年 11 月に打ち出された幣制は 1 円銀貨を本位貨幣とする銀本位制でした。あたらしい国家建設に際して貨幣制度をどのようにするかという問題がいかに重要でかつ急がれていたかは、新政府が戊辰戦争を開始した 1868 年 1 月から間もない 4 月に「画一純正ノ貨幣ヲ新鋳スヘキコト」を決議し、造幣機械を海外へ発注し、造幣所建設にとりかかったことからも知られます（表 4）。翌年 3 月には参与会計官掛大隈八太郎（重信）と造幣判事久世治作の 2 名の建議にもとづいて貨幣の形状を円形にし、計算体系を十進法に統一して、金貨で踏襲してきた四進法を廃止することも決定しています。

本位貨幣を何にするかについては政権を樹立した 2 年目の 1869 年 6 月から検討を開始しています。その際の政府内の多くは旧幣制の踏襲を主張しましたが、開国に向けた外国交渉で前面に出て、きびしい国際状況への対

表4　円の誕生年表

年　月	進　展　事　項
慶応 3 年（1867）10 月	大政奉還。12 月 王政復古。三岡八郎新政府財政責任者となる。
慶応 4 年（1868）1 月	上方富豪に会計基立金 300 万両募集。
慶応 4 年（1868）4 月	「画一純正」貨幣新鋳方針決定。造幣所建設開始、海外へ造幣機械発注。当面、旧貨幣通用、二分金・一分銀等増鋳。
慶応 4 年（1868）5 月	丁銀豆板銀通用停止令、太政官札 4,800 万両発行。9 月、明治と改元。
明治 1 年（1868）10 月	古金銀交換令。
明治 2 年（1869）2 月	三岡八郎退陣、太政官札増発計画されるも 5 月、3,250 万両に縮減。新鋳悪貨や贋金流通もあり、翌年札価低落より回復。
明治 2 年（1869）3 月	新貨形状を円形に、貨幣呼称を十進法にふさわしいものとするよう大隈・久世より建議。
明治 2 年（1869）6 月	大隈、伊藤、井上ら新貨幣制度（銀本位制）の概要協議開始、11 月各国公使・領事に通告。
明治 2 年（1869）11 月	小額札不足により民部省札 750 万両発行、2 分～ 1 朱の 4 種額面。銀本位制実施案を各国公使に通告。
明治 3 年（1870）8 月	新貨幣の種類・図柄・品位・重量を確定（香港ドルを基準）、11 月公式発表。
明治 3 年（1870）12 月	米国出張中の伊藤博文より金本位制採用の建議。
明治 4 年（1871）1 月	大蔵省、新貨条例および造幣規則仮定。4 月、伊藤の建議を採用し、金本位制採用に変更（実質は、金銀複本位制）。
明治 4 年（1871）2 月	大阪造幣寮開業式。
明治 4 年（1871）5 月	新貨条例布告。

応にさらされてきた若き人材が国の方針をおおきく支配するようになっていました。とりわけ彼らに影響を与えた主力は、当時、貿易決済実務に際して不可欠の存在であったオリエンタル・バンクの支配人 J. ロバートソンと、イギリス香港造幣局閉鎖とともに施設ごと来日することになった造幣首長のキンドルでした。とくにロバートソンは、東アジアで広く流通しているメキシコ・ドル銀貨と同位同量の銀貨を本位貨幣とする銀本位制を勧告しました。東アジア一円に価値尺度・決済手段となっている洋銀に合わせて、香港でイギリス独自の銀貨を鋳造しようとしたキンドルも、当然に日本に対して銀貨本位制を提言します。

これに対してわが国のねらいは、実質的に金本位制に帰結しつつあった江戸期幣制を継承しつつ、国外で大勢を占めている銀本位制にも合わせる金銀複本位制の採用でした。そのメリットは、金と銀の両方を本位貨幣にすることにより、国際市場でより価値の低い方を主流通貨幣として素材にでき、開国期のような貨幣流出を回避できることです。このため日本当局は外国顧問の勧告に従うふりをして、1 円銀貨を本位貨幣とする各額面貨幣の量目と品位を定めますが、金貨については明示しませんでした。明示すれば、金貨は円銀の補助貨幣であることが明確になるからです。

1869 年 11 月、政府が外国公使・領事に示した示した新貨幣案を三上隆三『円の誕生』に依拠して紹介すれば、以下の通りです（この案が 1871 年 5 月に公布した新貨条例の「本体」になります）。

> 今般、我国政府ニ於テ、漸次増益スル国用ニ供補シ且外国貿易ヲ盛大ナラシメンカ為メ、全ク新種ノ貨幣ヲ発行シ、在来ノ貨幣ニ増加センコトヲ決定セリ。
> 新規発行スル貨幣ノ本位トナル者ハ、其量トロイ斤四百十六ゲレイン（＝ 7.22592 匁＝ 27.1g）ヨリ減スル事ナクソノ質ハ純銀十分ノ九ノ銀貨ナルヘシ。故ニ其銀貨ハ墨西哥ドルラルト同品位タルヘシ。
> 右本位ノ銀貨ヲ分割シテ更ニ細小ナル銀貨ヲモ鋳造スヘシ。其小貨之定量未タ細精ニ治定セサレトモ、概ネ左ノ如クナルヘシ。
>
> | | |
> |---|---|
> | 五十セント貨 | トロイニ百ハゲレインヨリ減セス
銀質十分ノハ |
> | 二十五セント貨 | 同百四ゲレインヨリ減セス
同 |
> | 十セント貨 | 同四十一ゲレイン六ヨリ減セス
同 |
> | 五セント貨 | 同二十ゲレインハヨリ減セス
同 |
>
> 是等ノ貨幣ハ便利ノ為メニセントスル者ニシテ、唯些少之金高ヲ払フ為メニ而已用フ。
> 又金貨ヲモ鋳造スヘシ。其金貨ハ本位銀貨之十箇・五箇・二箇半ニ当ル者ニシテ、唯便利之為メニ之ヲ用フヘシ。
> 其定量未タ細密ニ治定セサレトモ、小銀貨ニ均シク些少ノ金高払方ニ而已之ヲ用フヘシ。然レトモ請取人之存意ニヨリ大金高ヲ請取ラント欲セハ勝手次第タルヘシ。

外国顧問団の勧告に従い、シンプルに銀本位制を導入することには以下のような問題もありました。開国時のわが国基本貨幣が「金貨」であったことはすでにふれたとおりですが、その「金 1 両」とは多種品位が並立して混合流通していた幕末維新期流通「金貨」のうち具体的にどれであったかということです。「金貨流出」が問題となったさいの金貨とは、国内外の金銀比価の差異から判断して、当時もっとも 1 両あたり純金量の多かった「（天保）小判」でしたが、では維新前後に国内で流通の金貨は何が主流であったかというと、表 2 に示したように、ダントツで「万延二分判」（写真 9）でした。一口に「小判」と言っても、1 両あたりの純金含有量をくらべると、天保小判は 1.7 匁、開国直前の 1859 年に発行した安政小判は 1.36 匁、開港後の金貨流出を食い止めるために急遽鋳造した万延小判は 0.5 匁になりました。ペリー来航以前の基準金貨である天保小判と、開港後の万延小判をくらべると、このように同じ「1 両」でも 3 倍以上の価値の差があったわけです。

さらに、実際に流通していた「金貨」を観察すると、天保小判こそ 800 万両以上もあり、当時出まわっていた金貨の中核となっていましたが、安政小判・万延小判は合わせても 100 万両ほどしか鋳造されていません。このように天保小判が開国以後に新貨幣へと改鋳されたあと、「金貨」として国内で授受されるようになるのは安政二分判や万延二分判でした。その発行量をみると、安政二分判が 355 万両であったのに対して万延二分判は 4,600 万両以上となっています。とくに、開国以降の「金貨」と言えば、万延小判の 70 倍も出まわっている万

万延小判
Man'en Koban
(Gold)
1860 年
品位 57%

万延二分金
Man'en Nibukin
(Gold)
1860 年
品位 22%

万延一分金
Man'en Ichibukin
(Gold)
1860 年
品位 57%

万延二朱金
Man'en Nishukin
(Gold)
1860 年
品位 22%

万延二分金は、当初金貨流出対策として発表されたが、その後の内戦状態のもとで大量に発行されて幕府財政の支払いにあてられ、急激なインフレと国内経済の混乱が生じた。

写真 9　万延期以降の金貨（原寸）

延二分判のことを指すようになります。その二分判の1両あたり純金量は万延小判の 0.5 匁に対し 0.352 匁でした。「銀製金貨」といわれる安政一分銀（写真 10）は 2,547 万両も流通していましたので、実際取引・使用されている金銀貨の比価は、この主流通金銀貨でのものになっていったわけです。しかも、安政一分銀（2.3 匁= 8.625g）の品位 87.3％は洋銀（量目約 27g = 7.2 匁）とほぼ同じであったことが、この後の明治期新貨幣に影響をおよぼすこととなりました。つまり、万延二分判 1 枚と安政一分銀 2 個が等価値ですから、国内の実勢金銀比価は 1：22.8 と大幅な金高でした。

写真 10　安政一分銀
Ansei Ichibugin (Shilver)
1859 年8月 品位 87%
安政二朱銀の発行を停止した幕府は、洋銀の鋳つぶして、洋銀引替え用の安政一分銀を発行した。

写真 11　貿易銀

このような状況下で「本位銀貨」としての「1 円銀貨」鋳造が開始されたわけです。ただし、この円銀を本位貨幣とする銀貨・金貨・銅貨 11 種を準備しつつある 1870 年 11 月、先進国の財政・幣制を視察研究のためアメリカ出張中の大蔵少輔伊藤博文は、当時の欧米が金本位の傾向にあることを察知し、急遽金本位制変更の建議をおこないました。政府首脳はもともと金銀複本位制を志向していたため、複本位制への変更に傾きますが、伊藤博文はさらに強く、金単本位制採用を主張します。ここに 1871 年 4 月、準備された銀本位制にもとづく新貨幣条例を取り下げ、翌 5 月 10 日、まだ鋳造さえも準備されていない「1 円金貨」を本位貨幣とし、準備されていた 1 円銀貨を補助貨幣とする新貨条例が公布されたわけです。当然に外国勢力は大いに反対意見を表明しましたが、このような不完全な形での新貨幣大勢が出発し、用意された円銀は「貿易銀」（写真 11）としてあらためて鋳造され、広く使用されることになりました。

参考文献

岩橋 勝『日本のお金の歴史』江戸時代、ゆまに書房、2015 年。
岩橋 勝『近世貨幣と経済発展』名古屋大学出版会、2019 年。
小葉田 淳『日本鉱山史の研究』岩波書店、1968 年。
日本貨幣カタログ　2018 、日本貨幣商協同組合、2017 年。
日本銀行調査局編『図録 日本の貨幣』1、2、4、7、東洋経済新報社、1972-3 年。
日本銀行貨幣博物館『常設展示図録』、1987、2017 年。
久光重平『日本貨幣史概説』国書刊行会、1976 年。
三上隆三『円の誕生』東洋経済新報社、1975 年。
山本有造『両から円へ』ミネルヴァ書房、1994 年。
Atwell,W.S. “International Bullion Flows and the Chinese Economy circa 1530-1650,” PAST and PRESENT, No.95,1982.

文化人の肖像採用のD券シリーズから、偽造防止対策強化のE券へ

（紙幣研究家）植村　峻

まえがき

国民経済生活に密接不可欠な銀行券は、偽造券との戦いに対して、常に最新の技術を備えている必要があるほか、時代の変遷に伴って、日常生活において使用する銀行券のデザインや肖像人物に関する好みや、社会における世相なども反映しており、新券発行後ほぼ２０年程度の期間が経過すると、新しい銀行券が登場するというのが、一般的な傾向である。

本稿では、まず、昭和３２～３３年に発行されたＣ券シリーズが、発行後約２０年以上経過した昭和５４年頃から新しいＤ券シリーズ券発行の検討が開始され、昭和５９年に初めての文化人の肖像を採用したＤ券3券種発行までの経緯や、当時の製造技術などについて紹介する。

発行当時は最新の技術を用いたＤ券も、その後のカラー複写機の性能向上、一方では銀行券の機械処理を担う自販機、両替機、ATMなどの進歩発達に伴い、それらの機器を騙す偽造券の多発に直面して、Ｄ券のミニ改刷を実施した。更に最新技術を採用して、将来のＥ券シリーズの先鞭を付けたＤ２千円券の発行や、偽造券撲滅を狙ったＥ券シリーズの発行までの経緯やその技術の方向を紹介する。

⊙　D券シリーズ導入に至る経緯とＤ券の持つ意義

Ｄ券シリーズに関する検討は、昭和54（1979）年の段階で開始され、その理由は

（1）　C券シリーズは、発行後既に１６～２２年が経過し、その間に民間における製版、印刷技術の向上や、カラー複写機による複写技術が普及し始め、偽造の脅威が増加してきたことであった。現に、昭和55年１月にはC1万円券の精巧な偽造券が韓国で大量に偽造される事件が発生（翌56年は日本に持ち込まれた）するなど、C券の偽造抵抗力の低下が懸念される情勢となっていた。韓国での偽造事件は、進んだ写真製版技術を用い、まず淡い３色印刷で地模様印刷を行い、特殊な網目スクリーンで肖像などの主な図柄を複製し、透かしは淡い灰色インキで印刷したものであり、仔細に観察すれば偽造であることは分かる。しかし日本の銀行券にはなじみの薄い韓国では、この偽造券が大量に偽造・流通し、更に日本にも持ち込まれ翌56年にはそれが名古屋において発見され、「和－108号事件」に指定されていた。そのほか、普及し始めたカラー複写機を活用した偽造券も、国内各地で多発していた。

＊参考：C五千円券は昭和32（1957）年発行で22年が経過、C1万円券は昭和33（1958）年発行で21年が経過、最も新しいC千円券は昭和38（1963）年発行で16年が経過していた。

（2）　当時はまだATM、両替機、自販機、券売機などがあまり普及していなかったが、やがて近い将来には高性能の機器が急速に増加、一般に普及することが予測されたため、銀行券の券面に、これに対応可能な機械検知機能を付与することが必要になるという予測があった。ちなみにC券シリーズでは、精緻な白黒透かし、多色シムルタン模様、細かい精巧な凹版印刷など、人間の目には容易に真偽判別が可能な優れた銀行券であったが、機械検知に対応した機能はほとんどなく、銀行券の寸法、透かし位置の検知などに過ぎなかった。そこで、ATM、自販機などの普及に対応して、銀行券の用紙面や印刷面で、機械検知機能を備えることが不可欠であると、通貨当局や印刷局では十分に認識していた模様である。

（3）　昭和54年当時は、51年頃から続いた経済成長期にあったため、銀行券の発行残高が、対前年度比で毎年10％強の増加が続いており、これに伴って銀行券の製造枚数も、特に１万円券の製造量が急増したため、近い将来には１万円以上の高額券の需要が発生すると予測されていた。そのため、将来の需要急増に備えて、可及的速やかに高額面の５万円券、10万円券の製造準備を行う必要があると、関係者は考えていた模様である。

＊当時の日本銀行券の発行枚数と製造枚数の推移　（単位：枚数は億枚、金額は兆円）

年度	昭和47	48	49	50	51	52	53	54	55
発行枚数 （指数）	20.50 （100）	23.53 （115）	26.13 （127）	27.89 （136）	29.71 （145）	31.51 （154）	34.14 （167）	36.67 （179）	37.34 （182）
うち1万円 （指数）	6.37 （100）	7.93 （124）	9.35 （147）	10.17 （160）	11.45 （180）	12.74 （200）	14.83 （233）	16.00 （251）	16.14 （253）
発行金額 （指数）	8.51 （100）	10.09 （119）	11.66 （137）	12.61 （148）	14.02 （165）	15.43 （181）	17.70 （208）	19.06 （224）	19.34 （227）
製造枚数 （指数）	27.04 （100）	24.30 （90）	26.50 （98）	27.00 （100）	28.00 （104）	29.00 （107）	29.20 （108）	29.60 （109）	30.30 （112）

（4）　一方、このような需要予測に対応する印刷局の銀行券製造能力は、手一杯であり、これ以上の機械設備や要員の増強にも限度があった。そのため１万円券以下の銀行券のサイズの小型化による製造枚数の増強も検討されたが、根本的な印刷能力の増加、省資源や銀行券の製造コスト削減を行うためには、高額券の発行が不可欠であると予測し、通貨関係当局は密かに検討を行っていた模様である。

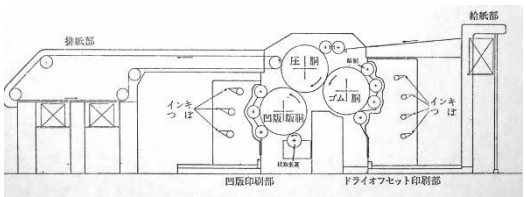
（5）　また、昭和 54 年当時は、印刷局には新銀行券の製造に不可欠な肖像などの凹版彫刻技術に優れた彫刻者が少なく、特に優れた技術を持つベテランの彫刻者であった押切勝造、笠野常雄・特別工芸官の定年退職が２～３年後に迫っていた。当時はまだ計画的な彫刻技術者の補充採用は行っておらず、短期間では肖像彫刻に優れた後継者の確保が難しい局内情勢であったため、ベテランの彫刻者が退官するまでに、５券種の肖像彫刻を急ぐ必要があった。

優れた凹版彫刻者であった押切勝造、笠野常雄彫刻官

（6）　更に当時の印刷局では、将来に予測される偽造防止効果に優れた各種の偽造防止技術の開発が進み、それら新技術を実用化できる製版や印刷、製紙の体制が整ってきたため、５券種同時発行に備えた製造体制は、ほぼ確立してきていた。

当時考えられた最新技術の内容とＤ券シリーズへの採用については、まず銀行券の用紙関係では、従来からの精緻な白黒透かしや、独特な色調・手触りの用紙ほか、透き入れ技術を応用した識別マークであった。また印刷関係では、細密凹版彫刻画線、凹版ザンメル印刷、地模様には連続的に色調が変化するレインボー印刷、多色を用いた豊富な色調と精緻な刷り合わせのシムルタン模様、凹版インキには複写した際に刷り色の再現が難しい条件等色（メタメリック）インキや、機械検知のために磁性物質をインキ中に混ぜるなど、凹版画線に新たな工夫を採用した。当時としては世界的に見ても最新の技術であったが、結果的には市場におけるその後の製版、複写技術等の急速な進歩発展には十分対応できなかったものである。

（7）　特に、C券製造で活躍したドイツのケーニッヒ・バウアー社製のジオリ凹版多色機や多色地模様用のシムルタン輪転印刷機の改良機として、印刷局が開発した銀行券の多色地模様印刷と凹版印刷を同時に、高速で精緻に印刷できる高性能の新鋭国産機「ドライオフセット凹版輪転印刷機」が全工場に複数台が設置され、しかも高速運転による大判 20 面印刷体制による製造能力の増加や、視力



印刷局が開発したドライオフセット凹版輪転印刷機　　その構造図

障がい者への対応などが可能な用紙製造機械設備など、高額券に対応できる新規の製造機械や技術体制が既に確立していた。

（8） 一方、世界の銀行券製造事情を見ても、主要各国において文化人の肖像を採用し、あるいは精緻な地模様印刷、更に視力障がい者のための工夫を凝らした新しい銀行券の発行が相次いでいた。また製版や複写技術の発達に伴い、銀行券偽造の脅威が増してきたため、券面に新たな偽造防止対策を追加採用するという風潮が普及しており、日本もこの世界的な傾向に乗り遅れないためにも、技術的にはやや陳腐化したＣ券に代わる新しい銀行券発行の必要性について、印刷局の技術者たちはそれを十分認識していた。

当時欧州など先進主要国においては、視力障がい者に配慮して、凹版インキを盛り上げた識別マークを採用、また先述した製紙印刷技術では、窓開き安全線スレッド、紫外線発光繊維の混抄、多色ザンメル凹版印刷、シムルタン模様、潜像凹版などの偽造防止技術を多く採用した銀行券の改刷が進んでいたが、まだホログラム箔や本格的な紫外線発光インキなどの偽造防止技術はほとんど見られなかった。

⊙ 紙幣改造にあたっての基本方針

このような国内外の諸情勢から、従来のC券3券種を改刷するだけではなく、新たに将来の需要動向を考慮し、高額の5万円券、１0万円券の製造準備態勢を早急に確立することが、当時は急務となっていた。

即ち、昭和 43 年から 54 年までの当時の銀行券発行高や発行枚数増加の著しい増加傾向に鑑み、製造担当の印刷局だけではなく、通貨行政を担当する大蔵省理財局や日本銀行でも、5 券種発行について真剣に検討を始めたのであった。

特に、5 券種発行の際、どのような人物を採用すべきかが、事前に検討された。事務局段階での素案では、従来通りの明治以降の政治家から新規の肖像人物を選定する案と、多くの国民に愛され、よく知られている著名な文化人を選定する案とが並んで提案されて、それぞれの人物に関する写真などの資料に基づき、ラフ下図を作成することとなった。当時のそれぞれの案は次のとおりであった。

年度	拾万円券	五万円券	壱万円券	五千円券	千円券
A案（文化人）	聖徳太子	野口英世	福沢諭吉	樋口一葉	夏目漱石
B案（政治家）	聖徳太子	原　敬	大隈重信	尾崎行雄	伊藤博文

肖像人物を選定する際の基本方針として、従来通り我が国のために大いに貢献した政治家とするか、それとも国民にとって人気があり、また対象人物に関してあまり好き嫌いがない文化人とするかとの、基本方針が検討された模様である。

従来の銀行券は、主として政治家の肖像を主体としてきたが、政治家による汚職事件の多発（ロッキード事件など）により、国民の政治家への不信感が広がっていた。一方、非公開で行われた限定関係者に対する事前の意向調査でも、利権に絡まず、広く国民から愛されてきた文化人の肖像を好む意見が強く、次第に「文化人案」が強くなった。なお、その際にも、最高額面には従来からの慣行もあり、聖徳太子の肖像を採用するという点では異論がなかった模様であった。

そのほか、同時期にスイス、オランダ、フランスなど西欧諸国で行われていた改刷でも、圧倒的に文化人の肖像や、女性肖像を選定する事例が増加していたことも、文化人肖像採用方針の大きな要因となった模様である。

更に、従来からの方針であった偽造防止に役立つ、豊かな顎髭を持つ人物を選定するという慣行については、昭和 54 年当時には、既に写真製版や印刷技術の進歩により、従来のように顎髭の豊かな人物であっても、微細な複写や写真製版、多色印刷が容易にできるような民間印刷業界での優れた技術の進歩がみられた。そのた

め、もはや髭のある人物に限定する必要はなくなり、髭のない人物や女性肖像であっても、広く国民に知られていて、著名で特徴のある容貌の肖像であれば、銀行券の肖像に採用できる可能性が増大していたのであった。

もちろん、改刷券の肖像彫刻に際しては、その対象人物に関する精緻な写真が存在することが求められ、特に大人だけではなく、子供にもよく知られた知名度が高い文化人が選定されることにより、教育効果も期待されたのであった。また、肖像以外の図柄に関しても、従来からの宗教色のある法隆寺など古代の寺院や収蔵物のデザインにはこだわらず、日本を代表する風景や動植物等を選定する方針を採用することとし、肖像人物や風景などの選定作業が行われた模様である。

⊙　D券シリーズの肖像決定に至る経過

当時の大蔵省関係者は、内密裏に高額券も含めた５名の肖像案を作成、渡辺美智雄大蔵大臣だけでなく、当時の鈴木善幸総理に対しても原案を相談した。しかし、高額券発行によりインフレを一層助長する恐れもあることや、昭和 54 年頃になって、それまで高度成長を続けてきた経済も急速に沈静化、銀行券発行高の伸びも極めて鈍化してきたため、最終的には当時の渡辺大蔵大臣、鈴木総理の決断により、５万円券、10 万円券の発行は取り止めとなり、３券種を同時に改刷、発行することが確定したと言われている。結果的には、その判断は極めて正しかったと言える。なお、従来の改刷では、１券種ずつの事例が多かったが、自販機、両替機の普及に伴って、何度も機器の改造を行うことがコスト面、利便性の面からも難しくなったため、券面サイズの変更と合わせて、３券種同時改刷の方針が決まった。

極秘裏に行われていた高額券発行の準備は、マスコミに若干気付かれた模様であり、一部には推測記事で報道されることがあったものの、この間の事情については、朝日新聞社の週刊誌「ＡＥＲＡ」の 1988 年 12 月６日号で、「追跡・聖徳太子拾万円札プラン、遂に日の目見なかったデザインを再現すると」に掲載されており、掲載されたデザイン案はあくまで想像ではあるが、当時の状況が概ね明らかになっている。そのほか、昭和 56 年７月７日の渡辺大蔵大臣による３券種同時改刷の記者会見での発表後の新聞各紙の報道でも、５万円券の発行が予測されるとの記事が若干みられた。

⊙　D券シリーズに採用された図柄

肖像人物の選定に際しては、当初明治以降の自然科学者７名、思想家や文学者が２１名、芸術家１２名が候補者として選定され、そのうち肖像彫刻の出典となるしっかりした写真が存在する者、広く国民に知られている者、その他クレーム発生の恐れがない者などを選ぶという選考基準のもとに、人物選定が行われた。

昭和 59 年に同時発行されたＤ券３券種

⊙　D券文化人３券種の肖像候補と決定肖像

（１）　３券種の肖像の図柄決定

Ｄ１万円券：　当初の肖像案には、福沢諭吉と大隈重信が候補に挙がった。大隈重信は早稲田大学の前身である東京専門学校の創設者であり、教育者でもあったものの、基本的には明治期における大蔵大臣、内閣総理大臣などを歴任したベテランの政治家であったため、Ｄ券シリーズには文化人の肖像を選ぶという基本方針から、最終的に福沢諭吉に決定となった。もちろん当時は、何故早稲田を選ばないのかという意見も一部には聞かれた。

福沢諭吉（1834 ～ 1901）、明治初期の啓蒙思想家、教育者で慶応義塾の創設者。その肖像に関しては、和

服姿か洋装かの議論があり、当初は洋装の写真を基に、コンテ画の作成、凹版肖像の彫刻を行う予定であった。しかし、慶応義塾関係者の意見により、生前における福沢諭吉の強い希望もあって、洋装ではなく和装で、しかも羽織、紋付姿の公式な和装姿でもない、日常の着物と羽織姿の写真を採用することとなった。出典となった写真は福沢諭吉が５６歳当時のものであり、銀座の著名な丸木写真館で撮影されたもの。当時和装の写真は、慶応義塾の塾長室に飾られていたが、現在は慶応大学内の慶応義塾展示館に所蔵・展示されており、またこの姿は慶応義塾図書館旧館前などに設置されている和装姿の銅像でもみることができる。肖像彫刻は、かつてＣ千円券の伊藤博文の肖像凹版彫刻したベテランの押切勝造彫刻官が担当した。

当初予定された
洋装の福沢諭吉の写真

和装の肖像写真に
変更

福沢諭吉の
コンテ画

D1 万円券の
凹版肖像

慶応義塾大学構内の
銅像

Ｄ５千円券：　当初は女性肖像を採用する予定で選考を行い、樋口一葉、与謝野晶子、津田梅子らが候補に挙がった。しかし、当時の議論では樋口一葉は優れた文学者ではあるが、病弱で若くして病死したこと、与謝野晶子については孫の与謝野馨が現職の衆議院議員であったことなどから、議論を呼んでは困るという懸念から、女性肖像の採用をあきらめたのであった。その代わりに、農政学者で、東京帝国大学教授などを務め、晩年においては女性教育に尽力し、東京女子大学学長を務めた新渡戸稲造の肖像が採用された。

当初Ｄ５千円券に採用することが検討された女性肖像
（与謝野晶子、樋口一葉、津田梅子）

最終的に決まった
新渡戸稲造の写真

新渡戸稲造（1862～1933）は、教育者として大学教授等を務めたほか、国際連盟の事務局次長を務めた国際人であった。基になった写真は、55 歳当時に妻のメアリー夫人と並んで撮影した娘の結婚披露宴当日のもので、白いネクタイを締め、顎に手を当て、やや顔を傾けてリラックスした姿であった。彫刻を担当したのは笠野常雄彫刻官であり、かつてＣ５００円券の岩倉具視の肖像を担当した経験を活かし、正面を向いた姿に修正したのであった。

肖像の基になった娘の結婚披露宴の際の写真

真っ直ぐな正面向きの肖像に
修正された新渡戸稲造のコンテ画

D5 千円券の凹版肖像

D千円券：　夏目漱石（1867～1916）。誰もが良く知っている小説家、文学者で、対抗馬となる人物もなく、すんなりと肖像採用が決定した模様である。肖像の基になった写真は目黒区駒場の日本近代文学館所蔵の45歳当時の写真であり、この写真は明治天皇の熱心な崇拝者であった漱石が、明治天皇崩御の後約1年間にわたり喪に服すように、黒ネクタイ、黒腕章をしていたその姿で撮影したものであった。当時漱石は健康状態があまり良くなく、やや元気のない容貌であったが、肖像の凹版彫刻担当の押切勝造彫刻官は、健康そうな表情に彫刻している。

肖像彫刻の基になった夏目漱石の写真

夏目漱石のコンテ画

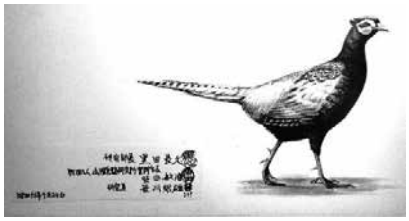
D千円券の凹版肖像

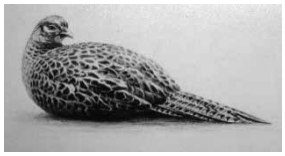
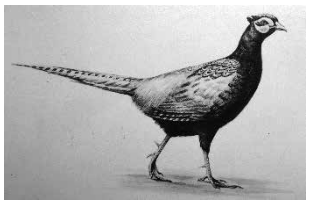
写真提供元の日本近代文学館

（2）　肖像以外の図柄等の決定

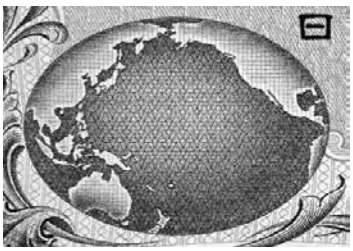
各券種の裏側や補助的な図柄に関しても検討が進み、原則として我が国の天然記念物などの鳥類の図柄を採用することとなった。当時は夏目漱石に絡み、猫を描く案もあったようであるが、動物の場合は人によっては好き嫌いもあるため、鳥の図柄を採用する方針を定めたようである。

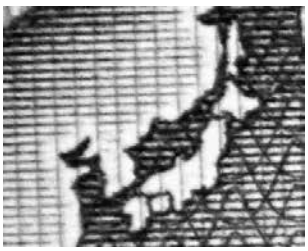
D1万円券：　日本の国鳥（昭和22年指定）であるキジの雌雄を採用、左には立ち上がった雄を、右には座り込んだ雌をデザインしている。キジの図柄の作成に際しては、デザインを担当する図案官が、上野動物園に足繁く通いスケッチを行ったが、やや肥満気味で野性味に欠けることから、神奈川県真鶴町のキジ園でのスケッチを行い、原図を完成させたのであった。また、そのデザインについては、専門家である山階鳥類研究所・研究員の考証を得て、図柄を確定し、矢島栄彫刻官が凹版彫刻を行った。

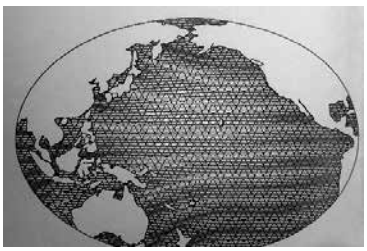

山階鳥類研究所の考証済みキジの図柄



キジの原図の図柄

D5千円券：　表面の図柄は、国際人であった新渡戸稲造にちなみ、国際人としての活動、特に日米間における平和交流の努力を強調するために、日米両国を挟む太平洋を中心にした地域を、モルワイデ図法を用いて楕円形で描いている。地図の図柄では、細かい部分ではあるが、アメリカのハワイや日本の北方領土なども、はっきりと描くように配慮している。


表面のモルワイデ図法による太平洋を中心とした地図


拡大図


凹版彫刻前の彫刻原図

また裏面には他券種のような鳥類の図柄ではなく、日本を代表する風景として、本栖湖に影を落とす富士山の「逆さ富士」の光景を描いている。この図柄の基になった写真は、昭和 11 年に写真家の岡田紅陽が発行した「富士写真集」の構図や写真を参考にして、図案官や中田昭吉彫刻官が現地に赴き、写真撮影やスケッチを行い、原画を確定したものである。その際、左下部分の松の木は、現地には存在しなかったが、図柄構成の必要上から追加した架空の樹木である。　また遠くの富士山山容の描写は、ソフトな感じを出すため、鋭い直刻凹版だけではなく、部分的にはソフトな感じの腐食凹版・エッチング技法が採用されている。

参考とされた
写真家・岡田紅陽の逆さ富士

現地で撮影された写真

本栖湖に影を落とす富士の姿

D千円券：　肖像の夏目漱石とは関係なく、日本を代表する鳥として、北海道・釧路湿原に生息する特別天然記念物の鳥・タンチョウの雌雄を描いている。当初、印刷局の写真家や図案担当官が釧路湿原の現地に赴き、写真撮影を試みたが、タンチョウたちとの距離が遠過ぎるため、望遠レンズを使って努力しても、うまく撮影することができなかった。そこで、地元の有名な写真家・林田恒夫に依頼して、写真を数点借りてそれを基にデザインしたものである。当初発表された原図案では、雌雄の大きさの違いや、鳥の足元が雪に埋もれている図柄に関して、色々意見があったが、これも山階鳥類研究所の考証を得て、図柄の修正を行ない原画を確定し、岡村昭一彫刻官が凹版彫刻を行ったものである。裏面左にはタンチョウの雄の姿、右には雌の姿を描き、求愛行動を行う様子を描いたものである。

D 千円券裏面の釧路湿原のタンチョウの写真

山階鳥類研究所の考証を得て凹版彫刻した
タンチョウの雌雄の図柄

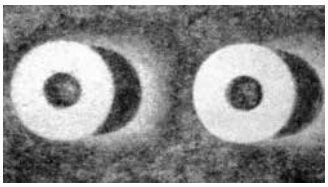
（3）　将来の銀行券の需要増加に備えた仕様変更

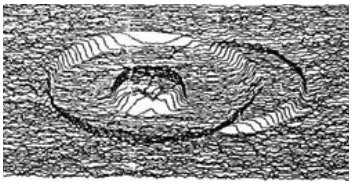
印刷に関しては、将来における銀行券の需要が急激に増加する可能性もあり、その場合には従来のような大型のサイズでは、製造が追いつかない恐れもあったほか、製造効率やコストの削減、更に将来増加する自販機などへの影響、利便性も考慮して、３券種の縦の長さを 76 ミリに統一、横の長さは千円券の 150 ミリから 5 ミリずつ大きくする仕様の変更方針が採用された。これに伴い、例えば 1 万円券の場合の単片面積は約 17％減となり、また銀行券の大判構成を 16 面から 20 面に増やし約 25％もの大幅な製造効率が改善されることとなったため、仮に将来高額券の需要が増加しても、十分対応できる体制が確立された。

（4）　D券に採用する偽造防止技術等に関する検討

紙幣用紙には、C券と同様に偽造防止対策の最も重要な要素として、シャープな白黒透かしを券面の空白部分

に漉き入れる方式が踏襲された。また、用紙には視力障がい者のために、券種の識別ができるよう、抄造段階で白黒透かしを用いた円形の識別マークを漉き入れる方針を採用し、券種毎にその形状を変え、千円券には点字マークの「ア」、5千円券には「イ」、1万円券には「ウ」の標示を使用した。印刷局が得意とする優れた透かしの技術を活かした指感性に優れた「識別マーク」としたのが特徴である。当時の世界の銀行券でも、主にオランダ、スイス、フランスなど西欧諸国の銀行券において、視力障がい者が券種を識別し易いように、識別マークが採用され始めていたが、それらは凹版インキを盛り上げ印刷したものであり、透かしの技術を採用したのは世界で初めてで、画期的なものであった。しかし、透かしの技術を駆使した識別マークも、新券段階では明確に券種が識別できるシャープさがあったが、銀行券が使用されるたびに、透かしによるシャープな円形や中心の点部分が押しつぶされ、指感性が劣化していった。そのため、透かしを用いた識別マークは、このD券シリーズだけで終わってしまい、その後発行された銀行券では、比較的劣化しにくい凹版インキの盛り上げ方式による識別マークに変更されたのであった。


白黒透かしを用いた識別マーク


識別マークの三次元形状

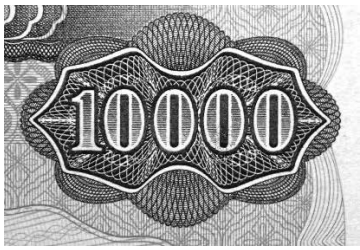
一層シャープとなった
精緻な白黒透かしの肖像

（5） 新たな偽造防止対策を導入したD券の3券種

C券発行段階では、まだ複写技術などの発達が顕著でなかったが、それでも多色オフセット印刷を用いた偽造券発生に対抗するために、インキの盛り上がった凹版ザンメル印刷、写真製版が困難な淡い中間色を用いた精緻なシムルタン模様、シャープな白黒透かしなどの採用が中心となった。これらの技術に関しては、当時の写真製版技術や多色オフセット印刷の向上、カラー複写機の普及等により、従来のC券に比べて一層の偽造防止対策の採用が不可欠となったためである。

例えば印刷面では、表面の「日本銀行券」や「壱万円」の文字部分には、凹版インキの盛り上げが従前の銀行券より顕著な、用紙面に30ミクロンもの高さがある「深凹版印刷」を採用し、一方では券面上部の左右隅部分や上下の唐草模様には、画線幅が狭い超細密凹版彫刻画線を用いた、混色のザンメル凹版画線を採用した。肖像自体も複製偽造されないよう、C券に比べてD1万円券の場合は約2倍の大きさに拡大され、しかも頭髪や目の部分には、1ミリの間隔に最大で10本の凹版細画線を採用、更に肖像部分には複写防止のため、凹版画線の下地の地模様に、ごく細い縦方向の平行万線を用いた。また、C券では地模様に色鮮やかなシムルタン模様が採用されていたが、D券では中間色を用いた淡い色彩の精緻シムルタン模様に変更し、オフセット印刷による偽造の際の写真複製が困難となるよう工夫が凝らされた。

縦細線入りの
深凹版印刷の肖像



白彩紋と黒彩紋を組み合わせた
凹版模様

中間色を採用のシムルタン模様

当時の初期段階のカラー複写機による複写偽造を防ぐため、コピーすると刷り色がやや黒変する条件等色（メタメリック）インキや、自販機や両替機などでの真偽判定用に磁性インキを採用するなど、従来に比べて一層の技術改善が図られた。

このうち、自販機や両替機用に採用された機械検知の際の真偽判定用の磁性インキは、やがて平成５(1993)年に、関西地方で多発した機器を騙す「偽１万円札事件」の際に、大きな打撃を受けることとなった。即ち、人間の目では容易に偽札と分かるような極めて粗末な印刷でありながら、所定の個所に磁性インキだけをはっきりと印刷したような粗末な品質の偽造券が、自販機や券売機のチェックをすり抜けるという事件で、極めて大きなダメージを受け、その手口などが新聞でも大きく報道されたのであった。

また当時は、世界的にも自販機などの紙幣検知機能向けには、今日のような紫外線や赤外線発光インキなどの特殊インキはまだ開発されていなかった。しかし、製紙段階では、世界に類を見ない大型でシャープな肖像人物の白黒透かしを採用するなど、昭和５４年の段階では極めて偽造抵抗力が優れた銀行券となっていた。

⊙　３券種同時発行のための様々な準備活動

従来のＢ券やＣ券シリーズで見られるように、１券種ずつ改刷するという方式については、Ｄ券の場合は自販機やＡＴＭなどの識別装置をその都度改造することは、大きな混乱を招く恐れがあるため、３券種同時発行の方針が定められ、昭和 56 年７月７日の渡辺大蔵大臣による記者会見で発表されたのであった。

渡辺大蔵大臣によるＤ券3券種発行の記者会見

Ｄ券発行の関連記事

Ｄ券3券種発行に関する新聞報道

もちろん大臣による記者発表前には、既に肖像人物が決定され、資料収集、ラフデザインの作成、本下図が完成していたが、発表後は製造枚数が多く必要量の確保のための製造に時間が掛かるD1 万円券から地紋版面や肖像などの凹版模様の版面の製造作業が始まり、続けて流通枚数の多いＤ千円券、最後に数量の少ないD5 千円券の順序で、印刷検査作業が展開された。

日本銀行券の発行に際しては、当時の日本銀行法第 33 条により「銀行券ノ種類及様式ハ主務大臣（大蔵大臣）之ヲ定ム。主務大臣前項ノ種類及様式をヲ定メタルトキハ之ヲ公示ス」と定めており、この条文に基づき、大蔵省告示で寸法、用紙、表及び裏の模様、地模様、印章、記号及び番号、更に表裏の図柄など、日本銀行券の様式を定めており、所管の大蔵大臣の決裁を得ることが必要条件であった。

１万円券については、昭和 57 年９月 20 日に渡辺大蔵大臣の下で、正式回校が、また 10 月 14 日に印刷開始式が行われ、その後印刷局の４つの工場での製造が開始されて、昭和 58 年４月以降日本銀行へ納入された。発行は昭和 59 年 11 月であるため、その間に世間で流通している特にC1 万円券と新券との取替え需要と、経済成長に伴う銀行券の発行増加分に対応するには、相当量の適正在庫を準備確保することが必要であった。

竹下大蔵大臣による
発行日公表の記者会見

千円券については、昭和 58 年 4 月 1 日に竹下登大蔵大臣への正式回校が行われ、4 工場で製造が開始された。また 5 千円券については、製造枚数が少ないため、最後の昭和 58 年 7 月 1 日に竹下大蔵大臣による回校が行われ、同年１２月から日本銀行に納入された。

⊙　D 券 3 券種の発行に伴うマスコミや世論の反応

渡辺大蔵大臣による記者発表に対しては、様々な反応が報道された。一番大きな反応は、過去の銀行券に幾度となく登場し、お札の代名詞ともなっていた「聖徳太子」が消え去ることであり、マスコミからも「さらば聖徳太子」のメッセージが多く、中には将来予想された高額5万円券に登場を期待する声もあった。D 券に文化人の肖像が採用されたことに関しては、おおむね好意的であり、女性の肖像のないことを指摘する声も聞かれた。もっとも大きな反応は、福沢諭吉に対抗して大隈重信を期待する早慶対決の声もあったが、文化人シリーズという基本方針のため、おおむね容認された。新渡戸稲造に関しては、「新渡戸 WHO」の声も一部に聞かれたが、その業績が知れ渡ると、おおむね人々は好意的な受け止め方となった。

⊙　偽造券多発に伴う、緊急対応のミニ改刷実施

小型化されたD券 3 券種は順調な製造が続き、日本銀行における適正在庫の確保や、自販機等の製造業界での事前機能検査も順調に行われ、昭和５９年１１月1日には、３券種同時発行となった。すなわち、当初の予想に反して、昭和 54 年以降は経済成長の鈍化に伴って、発行される銀行券増加の伸びも鈍化したため、当初心配されていたような発行枚数や製造枚数の増加はなく、順調な製造状況が続いた。

しかしながら一方では、当初予想された以上の早さで、品質が飛躍的に向上した安価なカラー複写機が急速に普及し、従来は企業でしか利用できなかったような状態から、一般人も容易に購入し、文書や図版複写に活用するようになった。一方、多色刷り用のカラー平版印刷機の製版や印刷技術も飛躍的な向上により、零細印刷業者や一般市民であっても、容易に偽造券を製造し、これを行使できる状況となった。やがて、高性能なカラー複写機の普及と、これに伴う偽造券の多発に対する対応が急務となった。

一方、渡辺大蔵大臣によるD券発行の報道がなされた後には、韓国におけるＣ１万円券の大量偽造と、名古屋への持ち込みが行われた「和−１０８号事件」、そして昭和 56 年 11 月には、大分県の印刷業者が経営に困り、所有する性能が優れた多色オフセット印刷機を使って、精巧な偽Ｃ５千円券を大量に印刷、主に関西地方の競馬場などで使用するという「利 - １８号事件」が発生した。しかし、実際には偽造券の製造は難しく、昭和 57 年には大量の損紙を大分県下のゴミ捨て場に廃棄したため、犯人の印刷業者が逮捕されるという事件が起こったが、そのほかにも一般人の出来心による偽札作りや使用が多く発覚し、D券改刷作業が加速し、昭和５９年１１月の３券種同時改刷を迎えたのであった。

偽札事件を報じる新聞各紙

⊙　順調なD券発行に対する偽造券の攻撃

やがて、新しい D 券を使用する銀行の ATM、自販機、券売機、両替機等の機器は、各方面で広く普及した一方、これら機器の銀行券識別特性を知った偽造犯たちは、人間の目ではすぐに偽札を判別できるような粗末な偽札だが、これらの機械では偽造券と判別できないような簡易な偽造券を大量に製造・行使し、主に関西地区の各地で被害が続出した。

最も典型的な偽造事件は、平成４～５（１９９２～９３）年に発生した「和Ｄ－５３号事件」であり、約５００枚の偽造Ｄ１万円券が行使され、機械が相手であるため、当時はまだ顔認証システム装置もなかったため、犯人の特徴も把握できず、多くの被害が発生した。犯人は自販機の機能を熟知した人物と推定され、Ｄ１万円券の偽造防止対策の一つである「磁気印刷」を逆手に採り、人間の目には一目で偽札と分かるような粗末な印刷ではあるが、凹版印刷部分に隠されていた最先端の磁気インキ部分だけを簡単な印刷で行った偽札を作り、自販機、両

替機などの機器を騙し、商品を窃取したり、釣り銭や本物の銀行券と両替するという手法であった。多分、磁気インキの特性を熟知した人物であると思われ、磁気インキによる偽札の鑑別方式を逆手に採り、図柄自体は簡易なコピーであった。中には銀行券の大きさの白紙の両端に、磁性物質を含むカセット用のテープを貼り付けて、自販機を通し現金を両替するという手法もあり、犯人像を捉えることも難しかった。

自販機、両替機を騙す偽札の横行に対抗するミニ改刷を報じる新聞各紙

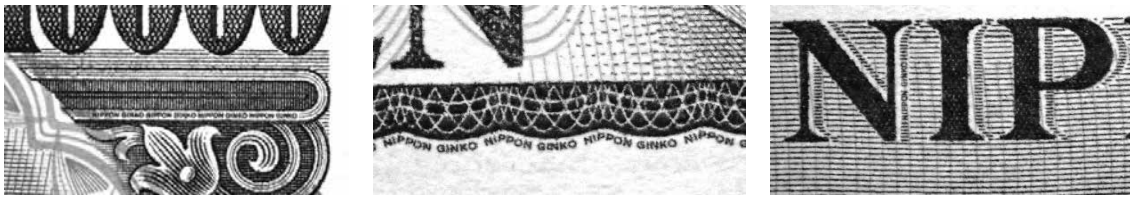
このような簡易な偽造券に振り回された自販機業界では、磁気印刷部分の検知のほかに新たな判別方式を追加し、自販機や両替機を偽札から護る技術を導入したほか、カラー複写機での偽造防止対策も強化された。もちろん発券当局でも、緊急事態への対抗策が検討されたが、短期間に全面的な改刷は不可能であるため、当面の暫定的な偽造防止対策を、「D券」に追加する「ミニ改刷」が実施されることとなった。やはり偽造防止への対応は、銀行券の製造技術面の向上だけではなく、それを使用する自販機やカラー複写機等の機械類の的確な対応が不可欠であり、更に国民の銀行券の偽造防止技術に関する知識の普及が不可欠であることが証明されたと言える。

⊙　D券３券種のミニ改刷の実施

当面の緊急的な偽造防止対策として、平成４年10月12日付けで、D券の基本的な図柄や仕様は変更せず、短期間で変更が可能な対応策が決まり、平成５年12月１日から発行することが発表された。これらの対応策は、カラー複写機等での精巧な複製ができないように、図柄の一部にマイクロ文字を追加印刷することと、紫外線発光インキを使用することであった。

(1) マイクロ文字の加刷

D1万円券の場合は、その表面に２か所、裏面に２か所、D5千円券では表面に１か所、裏面に３か所、D千円券では表面の１か所、裏面に４か所、コピーすると文字が潰れて複製できないように、マイクロ文字の字高が250ミクロンの大きさとし、凹版で「NIPPONGINKO」と追加印刷する方式を採用した。いずれも既存の図柄のうち、追加しやすい箇所を選んだもので、例えば１万円券と５千円券の表面では、上辺の額面金額の直下の彩紋模様枠の空白部分に目立たないように追加、１万円券裏面では下部の波状の輪郭枠の下部に、千円券裏面では上部の「ＮＩＰＰＯＮ　ＧＩＮＫＯ」の題字のうち、「Ｎ］の文字の右脇縦に陰のように小さくマイクロ文字を追加しており、いずれも複写が困難となるよう工夫されたものであった。



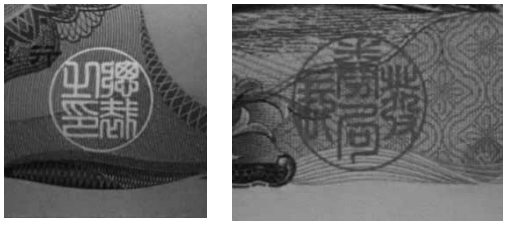
ミニ改刷で加刷された凹版マイクロ文字「D1万円券」と「D千円券」

（２）　紫外線発光インキの使用

また、表面の赤い「総裁之印」のインキには、暗中で紫外線を当てると、明るい橙色に蛍光発光する紫外線発光インキを使用した。これはカラー複写機では蛍光発光を再現することができないため、自販機などで偽造券で

あることを検知、判別できるものである。紫外線は波長が365ナノメータの標準的なもので、市販されている簡易な紫外線発光器具（ブラックライト）でも容易に検知できるように配慮されている。一方、裏面の「発券局長」印については、公表はないが、紫外線を当てると濃い赤色に蛍光発光する。

なお、このミニ改刷券については、従来のＤ券との識別のため、１万円券と５千円券については記番号を黒色から褐色に、千円券については青色から褐色に変更した。もちろん各機械メーカーにおいても検知機能が追加された模様である。



ミニ改刷で採用された紫外線発光インキで印刷した「総裁之印」と「発券局長」の印章

⊙　新しい偽造防止技術をふんだんに取り入れた「Ｄ２千円」券の発行

Ｄ２千円券の表面

Ｄ２千円券の裏面

一時期多く発生した偽造券も、ミニ改刷やカラー複写機等の検知機能の強化により、かなり減少傾向を示したが、平成10（１９９８）年頃から再びカラー複写機を使った偽造券が多発するようになり、これは日本だけではなく欧米でも同様であった。これに対抗するために、EU、主要欧米各国、日本などの主要11か国の中央銀行で構成された研究機関CBCDG（中央銀行偽造防止グループ）が組織され、更に各国の政府印刷局や印刷所、それに世界の指導的な複写機メーカーの技術者も参画して、カラー複写機による効果的な偽造防止対策を検討した。その結果、各国の銀行券の図柄の一部に特殊なマークを印刷し、コピーしようと試みても、そのマークを感知して複写を止めるという機能を複写機に装着することを要請するものであった。この技術は当初は秘密であったが、独特の目立つ色や形の小さな円形マークが良く知られるようになり、各国の中央銀行は情報開示をしていないものの、間もなくインターネット上等で広く世界中にPR、周知されるようになり、今や「ユーリオン・マーク（オムロン・マークともいう）」を知らない人はなく、この模様は最近発行の世界のほとんどの銀行券に採用されている。もちろん、このユーリオン・マーク以外にも、非公開の模様などを採用している銀行券も多く、これによってカラー複写機による偽造券は世界的に激減しているのが現状である。

（１）　ミレニアムにちなむ図柄採用のＤ２千円券

そのような世界の動向の中で、日本の印刷局においては、最新の偽造防止対策の研究が進んだ結果、その改善された技術を実製品に応用する必要が強まっていた。また、ちょうどその頃、西暦2000年（平成12年）に開催されるＧ８サミット（主要国首脳会議）が沖縄県を会場として開催されることとなっており、政府としてもそれに相応しいイベントや記念行事の実施を模索していた。

このような環境下で、ミレニアム（西暦2000年）にちなんだ通常銀行券としての「2千円券」を発行する案が、小渕恵三総理の下に届けられた。戦前には「2」の単位の付く中間券種の銀行券として、２０円や２００円などが、５回発行されており、それぞれ省資源化や利便性から比較的広く使われていたが、インフレが顕著であった終戦前から終戦後にかけては、まったく姿を消していた。

2000円札、来夏までに発行
自自公連立内閣が発足
首相会見
早急に経済対
積極的な補正予
千年紀記念事業の目玉

小渕総理による２千円券発行の記者会見

2000円札登場「なぜ？」
沖縄歓迎「飛躍の契機」

D2 千円券発行関連の新聞記事

小渕総理としては、新たに「2」の単位のつく銀行券が、戦後初めて発行されること、発行予定年が 2000 年であること、また開催地の沖縄県にちなむ図柄が描かれること等で、Ｇ８サミットを PR するという面からも極めて効果的であると考えた模様である。そこで総理は、宮沢喜一大蔵大臣にその意向を伝え、宮沢大蔵大臣はこの提案に心から賛同して、２千円券に採用される図柄について、極めて有益な提言をされたのであった。なお、２千円券を提案された小渕総理は、Ｇ８サミット開催前に亡くなり、後を継いだ森喜朗総理が各国代表にその銀行券を贈呈したと言われている。

即ち、表面にはＧ８サミット開催地の沖縄県を代表する伝統的な「守礼門」の図柄を採用、裏面にはミレニアムに関連して、日本が千年以上の昔から優れた文化をもっていたことが国際的に PR できることから、紫式部が著した「源氏物語」を図柄で描くことが提言された。宮沢大蔵大臣のアドバイスもあり、鎌倉時代に描かれた「源氏物語絵巻」の中から、最も相応しい図柄として、光源氏と冷泉院が向き合って語り合う光景を描いた「鈴虫」の段が描かれた。また源氏物語の作者である紫式部の姿も、裏面右下隅に描かれたのであった。

守礼門全景

コンテ画

凹版彫刻された守礼門

凹版彫刻を行う
栗嶋茂彫刻官

⊙　Ｄ２千円券に採用された新技術は、後のＥ券シリーズに反映

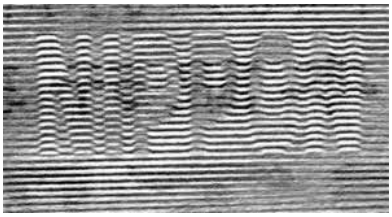
日本におけるその後の偽造事件発生の傾向を見ると、D 券ミニ改刷の要因となった自販機や両替機を騙す簡易な偽造事件は、ミニ改刷によるマイクロ文字の採用や紫外線発光インキの導入のほか、自販機等のメーカーによるより複雑な真偽判別装置の導入によって、平成３（１９９１）年までは、減少傾向が続いた。しかしながら、平成１０（１９９８）年以降、再びカラー複写機を使った偽造券が増加し始めた。その背景には、性能が優れたパソコン、スキャナー、プリンターの普及により、専門的な偽造犯だけではなく、一般人でも容易に銀行券の複写が可能になったからである。このような傾向は日本ばかりではなく、世界的な動きとなり、先述の CBCDG や、世界的な複写機メーカーによるユーリオン・マークなどの採用方針が提言されたのであった。このような動きも念頭において、Ｄ２千円券にはミレニアム時のＧ８サミットを意識したほかに、最新の偽造防止対策を備え、将来の改刷時の、いわば実用化実験という位置付けとなったのである。従って、Ｄ２千円券には、これまでと変わり、最新の偽造防止対策が、数多く採用されたのであった。

（１）　銀行券の用紙面についての画期的な改善

紙幣用紙については、従来と同様に白黒透かしを用いて、中央の空白部分に「守礼門」の図柄が、極めてシャ

ープに透き入れられたほか、用紙の抄造段階での透かし部分とエンボス加工を組み合わせた「特殊潜像模様」を採用したことであろう。裏面右上部分に採用された新技術は、お札を一定角度に傾けると、「NIPPON」の文字が浮き上がる国際特許技法であり、世界的にも高く評価されたのであった。

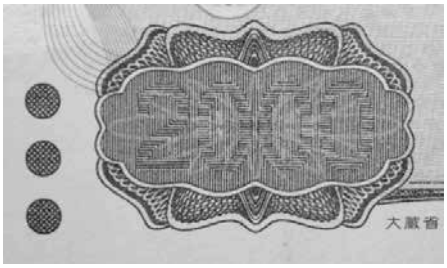
特殊潜像模様 NIPPON



特殊潜像模様の透過写真

また紙幣用紙の抄造段階で、表面の左右端には、お札を傾けるとピンク色に淡く光る「パールインキ」が印刷され、また用紙の色もD券と同じように複製しにくい淡い褐色を採用した。一方、D券3券種に採用されてきた白黒透かしによる円形の識別マークの採用を取りやめ、凹版インキによる指感性の良い縦3個（点字の「に」）の円形識別マークの盛り上げ印刷に変更されている。

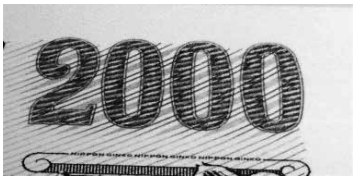
パールインキでの印刷



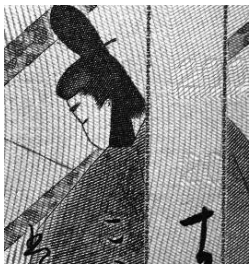
潜像凹版と凹版識別マーク

（2）印刷面での種々の新技術

印刷面では、表面左下隅に「潜像凹版模様」を採用しており、凹版細密画線の方向を一部変えることによって、眺める角度により「2000」の数字が現れる技法を、初めて採用している。また「弐千円」や「日本銀行券」などの表題文字部分には、インキの盛り上げが30ミクロンにも達する顕著な盛り上げ印刷の「深凹版印刷」を新型のUV-OXインキの技法を用いており、また表面右上隅の「2000」の数字は、眺める角度を変えると、インキの色が緑色から紫色に変化するOVI（光学的変化インキ）を用いて、凹版方式で印刷している。そのほか、ふんだんにマイクロ文字印刷を表裏全面に採用している。



OVI（光学的変化インキ）を用いた額面数字



凹版マイクロ文字

D2千円券の印刷には、従来活躍してきた「ドライオフセット凹版輪転印刷機」に代わり、新たに開発され各工場に設置された新型の画期的な「ダブルオフセット・ザンメル凹版輪転印刷機」も用いられた。この新鋭機は、

従来とは異なる柔らかいＵＶ－ＯＸ凹版インキを用いて、インキの盛り上がりが顕著となる深凹版印刷で、指感性に優れ、マイクロ文字もシャープに印刷可能となった。また、地模様や凹版模様なども含めて表裏２０色印刷が可能な、高速・高性能な印刷が可能となり、Ｄ２千円券の印刷で大いに貢献した。

ダブルオフセット・ザンメル凹版輪転印刷機

そのほか、自販機などの紙幣検知用に赤外線反射吸収インキの採用や、Ｄ券ミニ改刷時にも採用された表面の印章部分や地模様部分の一部には、紫外線発光インキが継続採用されているほか、非公開の特殊印刷もいくつか採用している。複写防止対策としては、このＤ２千円券は世界に先駆けてユーリオン・マークを図柄の一部に隠して導入した部分もある。また表裏の図柄には、連続した凹版マイクロ文字列をふんだんに採用しており、特に裏面の図柄部分では、建物の柱や梁などの画線を、NIPPONGINKO の連続文字で構成するなど、カラー複写機による偽造防止に役立つよう配慮している。これらの技術の多くは、その後平成１６（２００４）年に発行されるＥ券３券種に継続採用されることになる。

このように、優れた新しい偽造防止対策を多く採用したＤ２千円券であったが、自販機等の各メーカーがＤ２千円券を識別できる ATM、両替機などの機器対応ソフトをあまり積極的に導入せず、また日常生活での「2」の単位のお札を使うという習慣がなかったため、人々が日常生活で円滑に使用できない状態となった。また、Ｄ２千円券に対する需要の伸び悩みに対応して、日本銀行も納入量を当初発表の 10 億枚を下回る 8.8 億枚で打ち切ったのであった。その結果、沖縄県を除く日本国内での使用が事実上制限され、実際は通常銀行券であるはずが、実質的には記念銀行券化してしまった。しかし、当初製造された銀行券の在庫も、最近では殆ど無くなっていると推定され、その希少性から紙幣収集家の間では、愛好紙幣として市場取引おいてその価格が高騰する可能性を秘めていると言われている。

⊙　Ｅ券シリーズ発行に関する検討と比較的短時間での発行へ

ミニ改刷を実施したD券は、その後のカラー複写機の精度向上や、自販機などの機器類の精度向上の要請には、十分に対応できるものではなかったため、財務省や日本銀行、国立印刷局では、偽造防止技術が万全な新しいE券シリーズの採用について、検討を開始した。３券種を同時に改刷し、発行するためには、少なくとも３年以上の準備期間と、機械メーカー等による事前の性能調査が不可欠であるが、その時間的な余裕もないことから、特に時間がかかる1万円券の新肖像の凹版彫刻をあきらめて、D1万円券の福沢諭吉像を、若干手直しして継続使用する方針を固めた。そして新５千円券の肖像に樋口一葉、新千円券の肖像には野口英世が選定され、また偽造防止技術としてはD２千円券で新規に採用したもののほか、新たな技術も導入したＥ券３券種の製造、発行に取り組むこととなったのである。

筆者は植村　峻　（紙幣研究家、一般財団法人印刷朝陽会・事務局長）

［参考文献］

国立印刷局編　「政府印刷事業史」（財）印刷朝陽会　２００５年発行
植村　峻著　「紙幣肖像の近現代史」　吉川弘文館　２０１５年発行
植村　峻著　角川文庫　「贋札の世界史」（株）KADOKAWA　令和2年発行
植村 峻著　「日本紙幣の肖像やデザインの謎」　日本貨幣商協同組合　２０１９年発行
村岡伸久著　「偽札百科」　図書刊行会　２０１０年発行
技術情報協会　「先端偽造防止技術―事例集―」　２００４年発行
Rudolf L.van Renesse「Optical Document Security」２００５年発行